

こころの健康

第 47 号

平成 24 年 6 月

愛知県精神保健福祉協会
(愛知県東大手庁舎)

名古屋市中区三の丸三丁目 2 番 1 号
電話 (052) 962-5377 内線 550

巻頭言

社会に出る自分という物語を紡ぐこと —高機能自閉症スペクトラム障害者の社会参加支援—

愛知県精神保健福祉協会前理事・愛知県臨床心理士会前会長 後藤 秀爾

大学4年生のアキラは、幼い頃からずっと周りの人たちとの間に変な違和感を抱いたまま育ってきた。幼い頃から周りの人たちが数字や漢字に見えていたので、仲間との遊びに入るためには、乱雑に撒き散らされた文字たちをまず、頭の中で整理しようとした。それで、オモチャで遊ぶよりも、数字や漢字を書くことに没頭した。きれいに並べられたときには気持ちが少しだけ落ち着いたが、何が起きているのか訳のわからない子ども集団に入っていき勇気は出なかった。また、辞書で覚えて多くの言葉を知っていたが、日常生活の中で相手のいう言葉の意味が分からなかった。学校でも「そんなことをしちゃあいかん」と言ってよく教師に叱られるのだが、「そんなこと」が何を指しているのかさっぱり分からない。学校の校則に書いてあるので正しいはずの行為が、非難されたり、無視されたりした。「お前、頭おかしいんじゃないのか」と面と向かって言われたこともある。要するに社会一般の「普通」が分からない。

それも困ったことだが、それ以上にアキラを悩ませるのは、周りの騒がしさだ。音だけでなく、色や臭いも耐え難いほど溢れていて、家の外では頭の中が混乱する。雨が降ったりすると、雨粒が当たって体中が痛い。夏の暑さはひりひ

りするほど肌を焼く。そんな時に教室が騒がしいと、刺激の総量が許容量を超える。授業中でも立ち上がって「うるさい!」と叫んだことも数知れない。自分が身体ごと分解しそうになって存在感が消え、気がついたら、手元のカッターナイフで自分の顔を切っていたこともある。そのことがきっかけで高校2年のときに医療機関を受診して、「高機能自閉症」と診断された。

大学では、言語学を専攻して、卒論のテーマは、指示語の研究に決めたのだが、具体的にどう進めたらよいか分からない。指導教員は、「あなたの問題意識を明確にしなさい」としか言ってくれず、指導が悪いと訴えても聞いてもらえず、とうとう退学届けを書いて持っていくと、教務の担当教員は理由を聞いたうえで、学生相談室を紹介した。相談室のカウンセラーは、その卒論のテーマは、アキラの抱える障害から派生する基本的な課題だから大事な問題だ、と理解してくれ、指導教員にも説明し、相談室と一緒に卒論の進め方を考えてくれた。

日常生活の中の指示語と、それが具体的に何をさすのかを、ひとつずつ整理することにしてリストを作っていると、幼い頃にも漢字の世界に没頭していた自分を思い出したりした。得意のリスト作りの作業に集中し、面接室で整理の

仕方を話しあううちに、頭の中で周りの人間関係も整理される感覚があった。そうすると少し勇気が出て、卒業前に社会経験のためアルバイトを始めた。仕事中に困ったことを相談すると、カウンセラーは具体的な事実を確認し、笑顔の作り方や、挨拶のときの声の出し方などを、やって見せてくれた。練習した通りにやってみると店長に誉められた。

誉められることが続くと、社会に出て働いている自分の姿が、少しだがイメージできるようになった。卒業すること、社会に出ることについての不安が少しずつ消えていくようだった。

近頃、自閉症スペクトラムやアスペルガー障害の名前を知っている人は増えたが、こういう不安の中身も分かってもらえるといいな、と思う。

平成 23 年度愛知県精神保健福祉協会 記念対談

「子どもの発達障害～それぞれの領域へ望むこと～」

講師：山中康裕（浜松大学大学院教授）

牧真吉（名古屋市中央療育センター所長）

司会：長坂正文（東京福祉大学教授）

日時：2011年6月30日（木）14時30分～16時

会場：愛知県芸術文化センターアートスペースA

司会（長坂）：東京福祉大学の長坂と申します。本日は、司会を担当させていただきます。よろしくお願いいたします。

講師の先生方のご紹介を簡単にさせていただきます。山中康裕先生は、1941年のお生まれで、名古屋市立大学医学部をご卒業後、南山大学、京都大学をご歴任され、京都大学退官後は京都ヘルメス研究所所長としてご活躍され、現在は浜松大学大学院教授を兼務されていらっしゃいます。『少年期の心』というご著書を皆様方もご存じではないかと思えます。お隣の牧真吉先生ですが、1954年生まれでいらっしゃいます。山中先生と同じく名古屋市立大学医学部のご卒業で、その後は民間の精神病院、総合病院あるいは大学病院などの精神科にご勤務されました。1995年から名古屋市児童相談所にご勤務されて、現在は名古屋市中央療育センターの所長をされていらっしゃいます。

早速対談に入らせていただきますが、テーマは『子どもの発達障害～それぞれの領域へ望むこと～』でございます。「発達障害」というテーマの講演や研修会などは数多く、いろいろなど

ころで行われています。ですから、今回は講演ではなく、対談というかたちで企画をさせていただきました。「教育」「医療」「福祉」「保護者」といろいろな領域やご家族の方々へどんなことが望まれるかということについて、このテーマが深まればと思っています。

では、はじめに、少しお二人のお立場とか、あるいは発達障害についてどのようにお考えになっているのかということをお話ししていただいてからテーマに沿ってお話しいただければと思いますので、まず牧先生からお願いいたします。

牧：山中先生の下で当時、私は自閉症児のプレイセラピーをやっていたのですが、自閉症は脳の器質障害という流れの中で行っていったので、全国広しといえども、プレイセラピーを当時やっていた人はほかにはほとんどいなかったのではないのでしょうか。

その後病院の精神科に行き、途中から児童相談所へ移ることになって、専ら子どもと付き合うようになったころから子どもの虐待が騒がれるようになり、発達障害が騒がれるように

なってきました。私たちは自閉症のことに
 関して、「カナタイプ」と「アスペルガータイプ」
 という言い方を昭和50年代にしていたので
 すが、今は発達ということを丁寧に考えていこう
 と思っています。

非常に困るのは、いま発達に関して数値化で
 きることだけを発達だと思っている人たちが増
 えているのではないかということです。特にいま、
 エビデンスが言われたりすると、客観的な
 ものが出てこないということで、中央療育セ
 ンターで発達に関する検査してもらってこそ診
 てもらったと思うのです。しかし、検査で出
 ることなんて微々たるものしかないわけです。

たとえば対人関係の発達はどうかとらえるのか。
 「関係性の発達が遅れている」というのが私の
 にとっての立場です。関係性というのは、遅れ
 ているけれどもだんだん発達していく。「障害
 だ」と言うけれど、たとえば「心の理論」で「サ
 リーとアン」の課題をやらせてみたら、できな
 かった子ができるようになった。できたことを
 そういう人たちは説明できないのです。発達
 してきたらできるようになって、発達が遅れて
 いるものだからうまく発達している人たちに比
 べて遅れているよね、というように考えればす
 ごく素直に分かる世界なのに、そういう考え
 方を、複雑に絡み合わせないといけないから難
 しいのですが、運動面の発達だとか知的な面の
 発達、あるいは対人関係の面の発達がどのあた
 りにいつているかということで、子どもたちを見
 ていこうと。そして、いま、どういうやり方
 でこの子がクリアしようとしているのかという
 ことをきちんと認識していこうということを個
 人的にはやっていますし、考えていますので、私
 のところへ来ていただくとあまり診断名は言わ
 ないし、逆に言えば、「知的な問題じゃないよな、
 この子は」と思えばあえて検査する必要もない
 わけです。

関係性の発達がどこまでできているのかと
 いうことを丁寧に考えていかないといけない
 のです。それまで多くの議論が脳の障害なの
 か、それとも環境によるのかということでした

が、そんなのは両方絡んでいるに決まってい
 ます。どっちなのだろうかという議論をしてい
 るから、脳はどうやって発達していくのかとい
 う話を皆さんはなかなかされなくて、当たり前
 なのですが、遺伝子が働きながら、そのときの環
 境によって起きた刺激によって脳は発達してい
 くわけです。だから、どんな発達をしていくの
 かと考えればいいのに、診断名を考えて、その
 診断名に応じた特別な対応が必要だと言ってい
 るものだから、その子がもっと発達したとき
 とんでもない対応をしていたりするというこ
 とがしばしば起きているということを私自身は感
 じています。

司会（長坂）：ありがとうございます。山中
 先生、よろしくお願ひいたします。

山中：私が精神科医になったはじめのころに、
 最初に取り組んだ自閉症の子どもたちと、神経
 症の子どもたちと、精神発達遅滞の子どもたち
 の3種類の子供たちがいました。精神発達遅
 滞というのは、脳のたとえば生化学的な異常、
 生理学的な異常、今の言葉で言えば遺伝子の異
 常であったり、酵素の欠損であったり、いろい
 ろな原因によっておきる。その子たちが病院に
 通ってきていましたから、生物学的に何らかの
 ものが欠損する、不足するとどういう状態に陥
 るのかということから出発したと言ってもいい
 わけです。

一方で、自閉症はどんどん増えてきていて、
 自閉症は1943年にカナが最初に発表し、そ
 こから自閉症という問題が起こってきたとい
 うのはご存じのとおりですが、1938年、カナ
 が発表する5年前にアスペルガーが既にその論
 文を書いているので、アスペルガーのほうが先
 だとか、どっちが先か後かという問題がいろ
 いろ出てくるのですが、そんなことはどちらでも
 いいのです。1930年代から1940年代にかけて、
 全く新しく生まれてきた子どもたちがいた。い
 まだに器質障害だ、脳の障害だということ
 を言っているけれども、誰も証明していません。

私は一貫して、子どもというものは一人一人
 違うのだから、何かでくくって、何とか障害と

か呼んでしまうというのは大間違いであると思っています。しかし、自閉症というものが出てきて、自閉性を示す子どもたちは、特に生きにくい、かかわりにくい。親や兄弟から言うと、どう接していいのかさっぱり分からないという事態が生じるわけです。そして、社会から言ったら全然かかわれないというとんでもない事態を示す子どもたちがその時代から発生してきたのは、脳の問題ではないと私は考えていました。

45年経ちましたから、現在、正確な物言いをすると、脳には二次障害が起こってきます。たとえば自閉症の子どもたちは10歳ぐらいから脳波異常を示す子が5分の1出てきます。さらに年齢が上がればもっとそのパーセンテージが上がってくるわけですが、それは私に言わせると原因疾患ではないのです。二次障害です。使わない回路がいっぱい出てくるのです。それが10年経過すると別の問題が起こってきて、一見、外見的に器質障害と同じ症状を示す事態が出てくるというのが私の見解でした。器質障害がないわけではない。脳波異常は器質障害の印だとされてきましたから、そういう意味ではエビデンス、脳波異常は明らかに脳の異常を示しているわけです。私は、とにかくこういった子どもたちが出てきたのは、プライマリーにどこか脳の異常があって何とかという考え方はおそらくあり得ないだろうと考えています。

自閉症が1930年代、正確に言うとカナーが報告した最初の دونالد という男の子は1933年生まれです。それから、アスペルガーが最初に診た子どもは、おそらくそれも1930年代の初頭です。1930年代から急に器質の疾患が出てくるというのはどういうことなのかをまず考えました。それは文化との関数だと、人間の生き方との関数だというように私は解きました。1930年代以前と1930年代以降で、人間の生活水準や環境で、何が変わってきたのかということを見ると、一番考えられるのは、日本ではもう少し先になるのですが、私は「通信革命」という言葉を使っています。日本では1926年にラジオ放送が始まりました。それから、1952

年にテレビの試験放送が始まりました。そして、1983年に通信の規制が取れて、携帯電話が普及し始めて、現在に至っています。

1952年から始まったテレビ放送がだんだん変わってきました。一家に1台だったのが2台になり、3台になり、各部屋になり、今では携帯の中にテレビを取り込むことができるようになりました。完全に個別化されて、人間が個人的に一人一人コミュニケーションを取るという構造が切れてしまったのです。私はこの『切れた』というコンセプトがものすごく大事だと思っているのです。そういう事態が起こってきて、自閉という事態が発生してきたと私は考えました。ただし、それはスペキュレーションですから、完全に頭の中で考えた妄想ですから、それを証明しようなんていう気はないです。

「どういう立場ですか」という問いなので、そこに戻りますけれども、いまだに私は「発達障害」などという言葉を使ったことはありません。あんなのは行政側が、学校側が勝手に都合よく自分たちが困っている子どもたちを一緒くたにしては、押し込めてきた流れの変遷に過ぎないのです。それよりも、子どもたち自身に発生してきて、一番困っているお母さんがいるわけですし、そのまわりに保育士さんや学校の先生がいるわけです。まわりの人たちがみんな困っていることは事実ですので、自閉症という名前がどうであれ、困っているという事実は否定していません。ただ、名称で言えば、発達障害というのは私の範疇にはありません。以前は自閉症とか、あるいは自閉症の中でもカナー型とか何とかというように分類した時代もありました。

それがどのように分類されたかということ、MBD (Minimal Brain Dysfunction) で、それはどういうことかということ、「脳器質障害」です。要するに、Minimal ということは微細脳損傷障害です。現在の方法論では発見することができないけれども、やがてはその方法論が顕然とされれば絶対に検査できるようになるであろうはずの器質障害がある疾患というのがMBDだっ

たのです。そういう名前と呼ばれたら、それはどういう子どもたちかという、実際にそういう診断名で呼ばれている子どもたちを見ていると、多動であったり、爆発したり、衝動性を発揮したり、まわりの物を壊したり、飛びまわったり、なかなか言うことが聞けなかったり、いろいろな子どもたちが一緒にたにされていました。それがいつの間にか、ここ十年ぐらい発達障害と言われるようになってきたわけです。

あろうことか、発達障害には全く違う範疇の、学習障害と言われるものと、もう一つ多動性障害というものが、そこに入ってくるわけです。子どもたちから言ったら、そういう名前が付けられていること自体が非常に不本意だと思うのです。Attention Deficit Hyperactivity Disorder という、いかにも英語で言われると何かそういう疾患名が本当にあるかのような錯覚に陥るのが日本人の悪いところで、それは何を言っているかという「注意欠陥多動性障害」という状態像を言ったにすぎないのです。

その発達障害にどうアプローチをするのかというテーマに、現在はなっているようです。

意見の違う子どもたちがまずいて、彼らにどういう方法で接しますかといっても、一人一人違うわけです。その子ども一人一人にどうアプローチできるかということで問うのなら話は分かるわけですが、「発達障害」にどう接しますかなどと言われても、そんなものは人間にどう接しますかということとほとんど等しいわけです。おまえたちは一人一人の子どもを綿密に見ているのか。その子どもが何に困っているのかということをよく見てご覧よ。一人一人見て、私はそこから始められるのです。子どもたち一人一人がどういう特徴をもっているのかということセラピストが分かっていたら、子どもは安心する場を持つことができるわけです。

安心する場を持つことができないと彼ら自身一番心の落ち着くことを始めます。それは症状であったり、行動であるとか言われたりして名前を付けられ、取らなければいけないこだわりや困った症状というふうにとらえてしまう人が

多いのですが、私に言わせると彼らの生き方の一つです。彼らの、生きにくいこの世の中で「こだわり」という症状を示すことによって、自分を何とかして守っている方法にすぎないのに、それを守っている方法を取ってしまってどうするのですか。だから、私はもう45年前に精神科医として出発したときから、一人一人子どもは違う、しかもその一人一人の子どもにどういうふうにかかわるかということを考える前に、その子がどういう子であるのかということきちんと言おう。それが私のやっていたことです。

最初の問いに戻りますが、私の立場を言えば発達障害という言葉は今でも使ったことはないということです。しかし、発達障害でくくられている一連の子どもたちの一人一人を見ると、その一人一人はいろいろある。先に言った学習障害という状態で困っている子、注意欠陥多動性障害で困っている子、いろいろなことが停滞して生きにくい子どもたちがいる。きちんとその子たちに合った対応を見つけながら、その子なりにもっと生きやすい状態を取るためにはどうするかということ、この45年考えてきました。

ただし、私の理論だけが正しいとは全然思っていないのです。私の理論はずさんな部分がたくさんあるし、間違っている部分もたくさんあるし、子どもたちの本当の真実は何だろうという問いかけは今でもしています。

司会 (長坂) : はい、ありがとうございます。早速、本質的なところがあふれ出てきて、このまま続けていただいてもという気もするのですが、一応テーマのほうが決まっておりますので、できるだけテーマにも沿っていきたいと思います。牧先生は「関係の発達の遅れ」という言葉を使って、「関係性の問題」と言われ、山中先生は自閉症の子どもについて、「関係が切れた」という言葉をおっしゃったと思うのですが、内容的にはすごく同じようなことをおっしゃっていただいたと思います。

では、教育分野についてですが、こちらの領域について最初に少し情報提供をさせてい

ただきますと、教育では2003年に文部科学省が、いわゆる軽度発達障害と言われているような、LD、AD/HD、あるいは高機能自閉症に該当する子どもがどれだけいるのかという全国調査を行いました。それは小学校・中学校を対象に、学校の先生がチェックリストを用いまして、チェックいたしましたら、児童・生徒の中の6.3パーセントがこれらに該当するというデータを示しました。その後2005年には「発達障害者支援法」というのができました。

また、2007年には文科省が「特別支援教育」という通知を出しました。これをもちまして、学校では「特別支援教育コーディネーター」という役割をとる者が置かれました。それから、「巡回相談」というものも始まりました。これは、その地域の特別支援学校、つまり昔からいう養護学校の先生が小学校や中学校に巡回してくるという、そういうシステムです。

このようなことを踏まえまして、学校現場とか、あるいは学校の先生とか、あるいは行政の教育委員会とか、このようなところに何かご意見とかございますでしょうか。

まず、牧先生、よろしいですか。

牧：私自身は、児童相談所という現場に勤務することによって、子どもの置かれている現状とは何だろうか、「子どもはどうして育っていくのか」ということを問うようになりました。今年でもう17年目なのですけれども、私が児童相談所に行って数年後に虐待がどんどん騒がれるようになりました。そして、虐待で死亡事件が起きますと、児童相談所に報道陣がたくさん押しかけて、仕事ができなくなります。非難だけです。「児童相談所は何をやっていた」「税金泥棒」と言って児童相談所にぼんぼん電話がかかってきます。そういうことをしたら解決するのでしょうか。

そういう中で、私が気がついたことは何かというと、そういう世界に最初にさらされたのが学校だったということに思い至ったのです。「学校は何もやっていないじゃないか」「学校がきちんとやっていないじゃないか」ということで、

ものすごく批難をされてきました。その結果、学校の教育能力が高まったかという、管理だけが高まりました。結果として、事が起きないようにすることが中心になって、子どもを育てることは外においていかれるのです。

子どもが育つようにするためには支えるしかないのです。先生たちが余裕を持って丁寧に子どもにかかわっていただいたなら、何も特別なことをする必要はないのです。そういうことをできないような環境をつくっている社会の問題だというふうに私自身は考えています。いろいろな法律をつくりながら、教員の数は増えてないのです。たとえば、30人学級をつくったときに、余裕のある先生たちを減らしただけです。教員の数としては、何も変わってないのです。だから、従来だったら、事が起きたときに応援に入る先生がいたのが、「30人学級法案」を通すために、応援に入る先生がなくなりましたと、はっきり言われます。

だから、私たちが現実を見ていくときに、法律とかそういうことで見ているかぎり、ものすごくずれているということです。私自身が児童相談所で見えてきて思ったことは、支えるまわりの人がないかぎり、結局、子どもは育っていかないということなのです。学校を非難し続けるかぎり、学校が守られないと、学校は子どもを守るどころではなく、学校を守ることに専念化します。私たちがすべきことは、学校を守ることであり、学校を非難することではないのです。子どもを守りたかったら、児童相談所を非難することではなく、児童相談所を支えることなのです。

実際問題、スクールカウンセラーを配置することよりも、教員の数を増やしてもらったほうが、どれほどよかったか分かりません。多くの現場で実は、本当は人がほしいのに、人の数を増員できないために、増員させられてきたのが、全部「心理」だったのです。たとえば児童福祉の現場でも、児童福祉でかかわるケースワーカーの数が極端に足りないわけです。それをごまかすためにやはり「心理」が入れられました。

確かに入れないよりは、入れたほうがいいに決まっています。でも、全体としての本質を見る人がいなくなってきたというのが、私が思っていることです。子どもがいかに育ちにくくなっているかというのを、私はつくづくと感じています。

子どもは親が育てているわけではない。学校が育てているわけではない。それを支えている地域社会が育てているのです。その地域社会がなくなったことを、学校を非難したり、家庭を非難したりしている、そのことに私は憤っています。そこを支えていかななくてはならないと思います。

子どもは、無難に育つことはないのです。次から次へといろいろな問題を起こしてくれるのです。次から次へと起こしてくれる問題に付き合う人がいるから育つのです。そういう大変なことを無くすことにエネルギーを費やしているというのが、今の社会であって、大変なことが起きていることに対して、一緒になって苦しんで乗り越えていくということを、一番失ったのは、私は社会だと思っています。

それを、学校の責任だとか、親の責任だとかという押し付け方をしているがために起きている問題だというふうに、私は考えております。学校の先生方は、よくがんばっている方々は、ちょっと支えていくものすごくよくやっていただきました。「2カ月に1回ぐらい、私が話を聞かさせてもらいます」というかたちでかわらせていただいたら、子どもがどんどん変わっていくのです。だって、学校の先生は毎日接していられますから。支える人がいてくれれば、結構変えることはできます。でも間違っても非難してはいけません。

その「支えている」というのは、直接その現場でやっている人たちだけでは無理なのだということを、私たちが全体として理解をしていかなければならないというふうで、私は考えております。

司会（長坂）：はい、ありがとうございます。山中先生、いかがでしょうか。

山中：「問題児でない人はいない」と私は思っている。実は、みんな隠しているだけで、みんな問題を抱えているのです。問題を抱えていない人がいたら、それは人間ではないのです。人間というのは、問題児なわけです。その問題児の話で、学校の問題に入りますと、私が一番端的に思い出すのは愛知教育大学の大学院ができる前に、大学院をつくる前段階として専攻科というのができました。専攻科というのは大学を出て10年ぐらい、一番年長者が20年ぐらい教師経験をお持ちになって大学に戻ってくるわけです。

そこで私は「精神病理学総論」というものを講義することになったわけです。精神病理学をくださいと講義しても、学校に役立つわけがないということを知っていますから、学校の先生たちと、どういう子どもが出てきて、どういう問題で悩んでいるのか、困っているのかという話をする授業の時間にしたわけです。私の試験の問1は「先生にとって問題児とは、どういうお考えですか」です。

私が一番感心した解答から言うと、教師歴20年の先生ですが。みんなが問題児として問題にするのは、関西弁で「権太」というのがあります。このへんではわんぱく坊主というのです。しかし、20年教師をやってきた経験によれば、「権太」は大体卒業して10年ぐらい経つと、ほとんどものの役に立っている人間になっているわけです。むしろ、卒業して5年ぐらい経ったときに名前が思い出せない生徒がいるかどうかで判断するわけです。クラスで40人生徒がいるわけですから、必ずいるはずですが、誰がいたかなと、33人、34人ぐらいまではいくのです。あとの6人がどうしても思い出せないとなるわけです。そこで写真付きの卒業アルバムを見ながら、番号をふっていくと思い出せなかったやつを、「確かにいたな。どうしたんやろ」となるわけです。ところが、経緯がさっぱり分からない、そういうのが問題児なわけです。「問題児」というのは、私の言葉でいうと、教師の息が全然かからなかった、目が届かなかった、そ

ういう子が問題児なんだ」と書いておられました。僕はすごく感心しました。

また、ある先生は「問題児、問題児と言う先生が問題先生なんです」と。「問題な先生が問題児を作るのです。問題児というのがいるわけではありません。これを問題だとする先生が問題なのです」。なにを問題視するかという視点のあり方で問題児は違って来るわけです。クラスをおどかさやつ、クラスを困らせるやつ、クラスでうるさいやつは問題児ではないと。問題児というのは関数論であり、問題とする先生がどういう視点でそれを問題児として区切るかという定義によって、問題児はたくさん出てくるわけです。

もう一つ、「教育」という言葉は「教」と「育」からなっています。「教」という漢字は子どもが下にあり、右側に「文」がある字は、ムチを持って、学問を教えるという意味で、それは「教」の要素です。「育」という字は、牧先生はさっきその部分を言われて「そだてる」という意味なのですが、育てるよりもっと前に「はぐくむ」という意味なのです。だんだん育てていく、「だんだんと人になる」という言葉がありますが、人となっていくのに「育てていく」というのが、育てる側の言葉です。子どものほうは育つわけです。親だけが育てるわけではないし、地域が育てるということをさっき牧先生がおっしゃったのですが、その洞察は正しいわけです。

特に現在、親はもう完全に孤立化しているので、核家族になって子どもを一人産むということがどういうことなのかということが、全然分かっていなくて子どもを産んでいる。前だったらおばあちゃん、おばさんの目があるから「あんた、なにしてんの」と、こういう時はこうするんだよと、ちょっと手を出してくれる手が横にたくさんあったわけです。そして子どもが、間違っても、いろいろなかたちで、周囲の目があって、まさに地域で育っていったものが、親だけ、子どもだけというのは密接で、しかも、アパートに住んでいる空間を考えれば分かるように、孤立化してしまっ

て子どもの養育の方向性が勝手に決められてしまうように錯覚する状況ができてしまったわけです。

だから、なかなか育てられなくなったのです。その分、社会と施設にはいろいろなサポートシステムがあるので、現在はそういうものを使うわけです。

そんな気持ちで、学校のほうに話を戻しますと、どうしようもなくなっている子を学校のせいにされても、先生としては、うちで何にも育てていないのに、学校にその責任を押しつけられても学校としては困るだけです。そこでトラブルが起こるだけです。お互いに責任を相手になすりつけている間、子どもは全然育たないわけです。

これも牧先生が言われたとおり、相手を責めているだけなら、何もならない、むしろ余計悪くなるわけです。教育の側から考えると、どの部分にサポートが必要で、どの部分が教えてあげなくてはならない部分で、どの部分が教えなくても自分で伸びていく部分なのかということ、ゆとりをもって子どもを包むという構造がだんだん消えてきました。教師は報告書やいろいろ管理のためのものが増えて、子どもと本当に接する時間が削られていったじゃないですか。そういう状況で教育ということが成り立っているわけですから、大変ですね。子どもも大変、教師も大変、親も大変。これはおかしいわけですね。そのおかしさをどうやってもう一度戻すかということも、どこに戻すかも分からないわけです。

私はこの間被災地に行ってきました。とても大変なんです。もう生活そのものが根底から揺るがされたわけですから。しかし、あの地震で何もいいことは一つもないというかもしれないけれども、あったのです。子どもの中で、いまままで自殺に走る子ども、それから無為、何も興味ないと言っている子どもはっさいゼロになりました。貧困とか戦争というのは両方ともないほうがいいに決まっているのですが、特に貧困とか非情な逆境というのは人間に、何を教え

るかという、お母さんもいない、お父さんもいない、うちに帰っても誰もいないわけです。けれども、俺は生きていかななくてはいけないという気持ちをいたいけな3年生や4年生の子どもたちが決意しているわけですね。その姿をつぶさなくて、どうやって育てていくか、教育していくかということが先生たちのテーマということになっているわけです。

それから一般論として、子どもの発達段階はどこを通るのか、どういうふうにして行くのか、人によって違うわけですが、最大限効果をあげるために教師がかかわり、支えているわけです。その構造をもういっぺん見直す必要があるということは思っています。子どもたちの育つ力をどう妨げないかというテーマと教育目標で要求されている子どもたちへの授ける部分、教育する部分、「教」の部分で最低限どの程度まできちんと伝えているのかということと、子どもが自発的に育ってくる部分との関数ですね、教育というのは。

そういうことが現在、問われていると思いますので、我々のような精神医学や臨床心理学の立場から見えてくる部分と教育から要求されている部分とそうでない部分とが付き合わされ、特にいまスクールカウンセラーというのが入り込んで、新風が入って動いているように見えますが、私はちょっと疑問を感じています。スクールカウンセラーになっている人たちもいろいろな資質があって、とてもすばらしい先生もいらっしゃれば、そうでない先生も当然人間ですからあります。それだけにちょっと別の風が吹いた初期段階はいいわけです。それからどうするかということを中心に考えていかないと、ただスクールカウンセラーを入れればよくなるというものではないのです。

司会（長坂）：ありがとうございます。時間が気になっているのですが、テーマもちょっと欲張ったかなという気がしております。「それぞれの領域」ということですが、医療については冒頭に、お二人の先生にかなり触れられていると思いますので、福祉とか、あるいは

保護者の方について何か少し「こんなことを」ということがございましたら。

どうでしょうか、牧先生、お願いします。

牧：一番言いたいことは、いかに周りが支えるかです。私は児童相談所という現場にいて何が見えてきたかという、皆さん「正規分布曲線」を考えてみてください。私たちが持っている力というのはバラついているのですよね。たとえば私は児童相談所にかかりましたが、児童相談所という場は1パーセントの子どもにしかかかわっていないのです。その1パーセントは当然底辺の1パーセントです。たとえば皆さん方だと、「知的障害者でIQ50の人に、IQ100と同じようなことをやれ」という要求はしないでしょ。そういう人たちと一緒に、私たちがどうやって子どもを育てていくかの問題に取り組むのが児童相談所だと私は思っているのですけれども、そういうことはやらせてくれないで、「(虐待を) どんどん通報しなさい」と言われるわけです。その結果、何が起きてきたかという、児童相談所は通報の処理機関になっていますから支援するところではないのです。通報数がべらぼうに多くて、しかも「48時間以内に直接行って子どもを見てこい」というわけです。

私たちがつくっていくべきことは、子どもを育てるためにいかに支えていくか、つながっていくか、です。それをしない限り、どんなことでもやっぱりうまくできない人たちや子どもたちがいるわけです。その人と一緒になって悩んで苦しんでやっていくことが私たちのやることであって、うまくいかない人を見つけて通報するなどというのは、私からすれば言語道断の技です。申し訳ないけれども、人を助けるという発想がないと私は思っています。支えるということは、そういうことではないはずで。

私たちの脳が最初に発達してくる部分は情報を共有化することなのですね。1歳までの間に私たちはどんな情報を読み取るかを共有していくと思っています。視線が合うかどうか、ニコッと笑ってそのニコツとした笑いが通じ合うかどうか、それがあかないかはすごく大事です。

逆に言えば、一緒にあちこち見て、同じものを見て、つまり同じ情報を読み取るから私たちは分かるわけです。私たちは知らない間に人に関する情報をたくさん取っているのです。そういうことができるようになっていくのには、親との間ですごく何かやっているわけです。

ところが、その発達がちょっと悪い人がいるのです。そうすると、「この子はどんな情報を取っているのかな」と気が付いてあげること自体が、子どもにとってすごく助けになりますね。そんなあたりで少し気にしながら付き合っていていけないかなと思って今やっている最中です。

司会 (長坂):ありがとうございます。山中先生、お願いします。

山中:僕は「福祉」という領域は、まだ本当の意味で親身にかかわり合っていない領域だという気がするのです。分かったようなことは言えないのですが、私がかかわっている領域は、せいぜい先ほど言った医療の領域と教育の領域、それから司法の領域で罪を犯してしまった人たちにかかわる先生方とかかわっていて、福祉の人とは一番薄いので、私は知ったかぶりしてものを言えないのです。だから、何も言えないのですけれども、私のところにかかわってられる福祉の先生方とのかかわりでものを言えば、不思議なことばかりですね。

たとえば、全然話が違って、たとえば生活保護というのがあるわけです。月々あたりいくら払われているわけです。ところが、私が理解できないのは、もしその人たちが働く意欲が出てきて働き出すと、いくらかを超えともうそれは支払われなくなってしまうという事態です。そういう事態があるたびに、生活ができていかなので仕事を辞めてしまう。労働意欲がせっかく出てきてプラスアルファが出たら、その分は全部その人自身の役得だというふうに考えるべきだ、と私は考えているわけです。

ところが世の中は経済原則が先なので、そういうふうには動かないのは分かっているのですけれども、どうも法律で決めていることという

のは、本当にその人を活かそうとしているのかということを考えさせられるのですね。

ギリギリのところに来ている人たちと、私は患者さんとして会っていたので、「先生、結局働いたら損なんですよ」と彼らが言うのですね。「働いたら損」というような事態は、その人が「よりよい生活を求めて」なんていうことを考えるわけがないのです。この部分でいかにして上手に生きるかという、非常にみみっちい感性になってしまうじゃないですか。そういう話がまず一つあります。

「福祉」というのは、結局人間というの、環境との関係でたまたま運良くいい家に生まれてきた子、たまたまとんでもない家に生まれてきた子と、いろいろなことがあるわけです。ところが、その人自身に責任があるわけではない、その子どもに責任があるわけではないから、さっき冒頭に牧先生が言われたように、「社会で見る」ということが、おそらく「福祉」という名前を名乗っている部分だと私には思われるわけです。その部分で、本来その人があるべき生き方をどうすべきかということ、突き詰めていく必要があると考えています。

その部分があまりなくて、市なら市に任せてしまう、県なら県に任せてしまう、国に任せてしまうというかたちを取っているものだから問題がいっぱい出てきています。だから、^{こくふ}国府の根本的な考え方というのは、一人一人がどう生きるかということ、どう可能にしていくかという体制を、どうやったら作れるかということ、やはりこれは政治の問題で、きちんとしなければいけないと思います。

最近はいろいろな社会福祉法人やら、いろいろなNPOなどが出てきて、ボランティア活動の人たちが介在することによって福祉の社会的な部分のウイークポイントを埋めていますが、さらにそういうことがもっと進展していく必要があるだろうと思いますし、我々一人一人がどういう社会を本当は求めているのかということ、もう少し考えていかなければならないと思います。

「切れる」という言葉を先ほど言いましたけれども、自然資源と、自然そのものにつながってなくて切れてしまっているわけです。川というものが我々を育ててきた部分、海が育ててきた部分があります。ところが、この間の地震を見たら分かるように、時々とんでもない事態が起こって海や川が人間を飲んでしまうという、ものすごいマイナスの部分も自然というのは持っているわけです。その中でどう我々が生きていくのかという根本テーゼを抜きにして、机上の空論だけ言っていてはだめなのです。

司会（長坂）：ありがとうございます。時間がまいりましたけれども、保護者と家族について、何か一点だけでもあればと思いますが、どうでしょうか。

牧：先ほど言ったことも含めて、支えられる必要があるし、つながる必要があるというのが、私がいま考えているすべてです。私たちは、子どもを育てていくためには、いろいろな人に支えてもらわなければいけない。親に叱られると、昔だったらピューッとじいちゃん、ばあちゃんのところへ逃げて行って「よしよし可愛そうに、怒られて」と言われるから子どもは育ったのですよね。子どもを育てる方針が統一されていなければいけないというのは、あれはかなり危険思想だと思いますね。

「子どもはいい加減に育てられなければいけない」というのを、改めて私自身は思っていますから、「子育てに統一した方針を」などというのは絶対に持たないでいただきたい。いい加減にいろいろかかっていると、でも「子どもがいろいろ教えてくれるよね」というあたりで、いろいろなことをいろいろな人から言われて、いろいろつながっているというのが、多分私たちのやっている、育てているということではないかなと思っています。

山中：今日のテーマである、学習障害とか多動性障害であるとか、いろいろな障害をもっている子どもたちを現実に自分の子どもとして持つておられる親御さんというのは、もうそれだけで大変なのです。そのご苦労はとてよく分か

りますし、大変であることもうそではありませんが、私がお母さん方と話し合うのは何かというと、医学化されすぎているということです。

たとえば、「こだわり」一つをとっても、それは「症状」と医学では呼び、教育分野では「問題行動」という言い方をするわけですが、症状であったり問題行動であったりというのはネガティブなもの、マイナスなものだと、なくすほうが正しいという思想にどうしても行きますね。でも、私は違うと思っています。症状とか問題行動とかネガティブなものの一見見えるものは、その子がその子になっていくために、どうしても通り抜けなければならないステップとして出てきているわけですから、ただなくすだけだったら解決にはならないのです。余計に違う症状や違う行動が出てくるだけなのです。だから、そこで耐えて、子ども自身が自分を守っている場合もあるし、お母さんを困らせながら、お母さんがどれだけ真剣に自分に向き合ってくれるかということを見ている関数でもあるわけです。だからと言って、お母さんだけに犠牲になれと言っているわけではありません。

そういうことを含めて考えると、その時々の手抜き、一時の逃げは、子どもにとっては10倍、100倍になって、後で余計に戻ってくるので、ますます困難な状態が証明されるだけですから、そのときに踏ん張って、「今この子を支えていくのは、まず自分しかない」。そして、自分しかない自分が、自分の味方になってくれる教師なり医師なりをどうやって見つけるかということで、子どもとのつながりを大事にしてほしいと思うのです。

そうして子どもが生きられる空間や時間が少しでも確保されていくようになったら、子どもは生き生きとしてきます。そのことが大事なのです。私は、今のつらい状況を「そんなものはどうでもいい」なんて全然思いません。もう本当におつらいと思うのだけれども、そのおつらい中で、子どもは親が思っているよりもっと、10倍・100倍ぐらいつらいと思っているということをちょっとお伝えします。そこから抜け出

すためには、逃げ出すのではなく、その問題そのものをきちんと見つめていくということが一番大事なのです。

これは「きれいごと」ではないのです。「言うが易し」ということは、ものすごく大事です。それで一生懸命がんばってくれている教師もたくさん知っていますし、医師も知っていますし、福祉士の人も知っています。けれども、きれいごとを言い出した途端に、もうだめなのです。「そういうことはないことにしましょう」にしてしまう間はもうだめなのです。「その問題は、マイナスに見えているけれども、実は、やがてはプラスに変わる部分があるよ」ということをお伝えしておきたいと思います。だから、今の苦しさは子どもがもう一つ大きい状態になっていくために通らねばならないステップを用意しているのだと思ってください。「おつらいけれども、がんばってください。」終わります。

司会（長坂）：ありがとうございます。あっという間に時間がまいりまして、あまりまとめにもなりません、お二人の先生方からいろいろなご示唆をいただいたと思うのですが、**「子どもを育む」とか「育てる」とか「守る」とか「支える」とか、**このようなキーワードを

お教えいただきまして、それはどの領域にということではなく、すべての領域に、あるいは保護者も含めまして共通しているのだなという思いがいたしました。

ですから、今日お話しいただいたことは、教育の部分が随分ウエイトを占めましたけれども、どの分野にも当てはまるのではないかなという感想を持ちました。最後は山中先生がおっしゃっていました、子どもの問題とか症状をネガティブなものとして捉えてしまうわけですが、実はそれは、その子どもが直面する課題であり、それをきっかけに周りの大人が子どもと真剣にかかわっていったり、自分自身を見つめていくことになったりということは、カウンセリングをしておりますと、本当にそうだなと思います。

今日は『子どもの発達障害～それぞれの領域へ望むこと～』というテーマにいただきましたが、それぞれの領域が全部がリンクして、周りの大人がどのように子どもにかかわればいいのかという視点をいろいろいただいたというふうに思います。

それでは時間が過ぎておりますので、今日はこれで閉じさせていただきます。お二人に拍手をお願いいたします。（拍手）

愛知県精神保健福祉協会『こころの健康を考えるシンポジウム』

発達障がいを持つ青年の社会復帰支援 ～特性理解にもとづく援助について考える～

日	時	平成 23 年 12 月 8 日（木）	
コーディネーター（座長）		大高クリニック	大 高 一 則 氏
話 題 提 供		愛知県立城山病院	大 村 豊 氏
		りんくす名古屋	山 口 徳 郎 氏
		日本福祉大学	若 山 隆 氏
		就労移行支援事業所マーム	山 崎 尚 樹 氏
指 定 討 論 者		名古屋大学医学部附属病院	
		親と子どもの心療科	吉 川 徹 氏

座長（大高）：本日はお忙しい中、多数の皆さんにご参加いただきまして、ありがとうございます

ます。今回座長を務めさせていただきます、大高クリニックの大高と申します。

今回は昨年当協会で開催した発達障がいについてその概略等をお話ししたシンポジウムの後を受けて、2回目の開催となります。事務局から、「大人の発達障がいについて取り上げたい」という依頼があり実現しました。

大人の発達障がいの話題は、やはり就労支援が主になると思うのですが、ただ単に就労支援という形だと、“働かざる者食うべからず”みたいになってしまって、本来生きづらい発達障がいの皆さんに、働くことだけをすすめるようなシンポジウムになることをちょっと危惧しました。そこで、「生きがい」としての就労はあるかもしれないが、働かずに生きづらさを抱えて、生きている成人の方たち、それから、青年の発達障がいの人たちにも目を向けたようなシンポジウムを開きたいと思いました。

ところで、最近、発達障がいブームになっています。本屋さんに行くと、発達障がいという言葉がどんどん一人歩きして、現在は「発達障がいバブル」と言っても良いような状態だと思います。

普通座長というのはいやべらないのですが、時間をいただいたので、少々話させていただきます。

私がお話したいことは、最近発達障がいといわれていますが、知能検査をすると、知的（認知的）に凸凹のある人たちがいるのです。今浜松にいらっしゃる杉山先生が、発達障がいの中心である広汎性発達障がいはその近縁領域を含めると、全人口の10パーセントぐらい、だから100人中10人ぐらいいらっしゃるのではないかとわれています。

そしてその人たちが何らかの活動や社会参加がうまくいかなくなってしまうと、医療機関にかかります。実際に医療機関にかかり、広汎性発達障がいと診断されるものは、その10パーセントの1、2割、そうすると医療で、広汎性発達障がいの有病率はイギリスではだいたい1パーセントぐらい、日本ではアスペルガー症候群を含んだ自閉症近縁領域の人たちの有病率が概ね2パーセントぐらいになるのではないかと

考えられています。

こういう幅広い発達障がいがいま問題になっていて、知的能力に問題がないにもかかわらず、様々な特性のため生きづらい人たちが多くいます。家庭・学校・職場・地域の人たちの特性理解をしたかかわりがとても大事になってきます。そういう中で医療がかかわれることは非常に少ないのではないかと私は考えています。

近年発達障がいの概念が、大幅に変わってきていることをきちんとお話をしておかないと、「発達障がい」として同じものを話しているつもりになって、まったく違うものについて話していることになりかねません。とりあえず、大村先生に広汎性発達障がいの概念の変遷と青年期の発達障がいについて話していただこうと思っています。

お手元に本日の資料を配付してあるかと思いますが、本日の流れを説明しておきます。シンポジウムの内容ですが、シンポジストの大村先生には、医学的診断的立場から口火を切っていただいて、青年期・成人期の発達障がいというのは、どのような人々を対象にここで話をするのかということ、もう少し明確にさせていただきたいと思っています。

二人目の山口先生には、ライフサイクル的に思春期以後の発達障がいの支援そのものとか、「りんくす名古屋」で実際に相談活動をされている中で、先生の豊富な経験をお聞きできればいいなと思っています。

日本福祉大学の若山先生には、現在最も支援の枠から外れがちな高校生、大学生年齢の、支援について話ししていただければいいと思います。この時期というのは、親以外の大人との出会いの時期ですし、大学での相談室の位置づけ、それからいまの発達障がいの方たちの若者の悩みなどについて触れていただければいいと思います。

最後に、発達障がいを持つ青年の社会復帰支援ということで、「NPO 法人障がい者自立支援センターなごや マーム」の山崎先生には、就労自立支援等について話していただければと

思います。成人の発達障がい者は親の老齢化などで、経済的に困難な状況に置かれがちです。就労支援を通じて経済的な保障や生きがいづくり、ジョブコーチの介入、余暇活動、仲間づくりなどさまざまな課題があると思うので、現在の活動を通じてお考えをお聞きしたいと思います。

これだけいろいろなことをお話しいただくだけでは焦点がぼやけてしまうので、吉川先生に指定討論者としてそれぞれのシンポジストへの質問という形をお願いしました。

**「発達障害概念のパラダイム的変化と
青年期の発達障害」
愛知県立城山病院精神科 大村 豊**

大村豊先生発言要旨：愛知県立城山病院の大村と申します。本日は発達障害の概念というのは時代とともに変わってきているということ。それから、今回のテーマの青年期の発達障害について、簡単にご紹介をしたいと思います。

歴史ということになりますと、カナーとアスペルガーに端を発することになります。まずレオ・カナー（オーストリア系アメリカ人）児童精神科医で、19世紀末から1981年まで生きた人です。

歴史的な論文となる「情緒的接触の自閉的障害」自閉症の幕開けになる論文ですが、これが1943年に出ております。外界との関わり方に独特の特徴を持つ子どもたちを報告しているのですが、そういう特徴をカナーは「自閉」という言葉を使って説明をしております。その特徴ですが、社会性の障害・コミュニケーションの障害・興味と行動の限局、その他の随伴症状について、現在の自閉症あるいは広汎性発達障害と基本的に同じ特徴というものを最初から発表しております。

一方、ハンス・アスペルガー。カナーと大体同じ時期、20世紀の初めから1980年に生きた人です。オーストリア在住の小児科医でした。アスペルガーの歴史的論文となったのは、「児童期の自閉的精神病質」という論文です。これ

が1944年ですから、カナーの1年後になります。

アスペルガーは話し言葉に遅れはないが、内容は奇妙で術学的、あるいは優れた機械的記憶、限られた特殊な事柄への記憶、奇妙な歩行や姿勢といったことで特徴付けられる子どもたちを報告しております。

カナーとアスペルガーはお互い独立に子どもたちの発表をしたということになっています。でも、どちらも同じ「自閉」という言葉を使っているのです。偶然と言われていたのですが、最近の研究では1938年にアスペルガーが今というアスペルガー症候群に当たるような子どもたちの論文をもうすでに書いていたということがわかってきています。

さて、当初カナー自身、自閉症の原因は先天的なものであると考えていたのですが、その後、カナー自身を含めて1950年代、60年代には心因論が優勢になっています。母親の育て方が原因であるという考え方です。

70年代になってマイケル・ラターの言語認知障害説というのが登場しました。現在も現役のイギリスの発達精神病理学者です。「生来の言語や認知の障害が、社会性の障害などを引き起こす。したがって、育て方が原因ではない」という、それまでの心因論とは全く違う説を出して大論争になりました。

その後、双生児研究、たとえば一卵性双生児、基本的に同じ遺伝子を持っている子どもたちが、たまたま異なる療育環境で育った場合にどうなるかというような研究です。それから自閉症の子どもが成長に伴っててんかんを合併することがしばしばみられることから、生物学的基盤がかなり影響しているだろうということがいわれ、さらに心因論に基づく精神分析的治療というものに限界があるということがわかってきて、ついには心因論が排除されていくという歴史をたどっております。

その後、自閉症概念が大幅に拡大されていくのですが、そこで大きな影響があったのはローナ・ウィングというイギリスの児童精神科医です。ラターと同じように現在まだ現役ですが、

彼女の歴史的な論文となったのが、1981年の「アスペルガー症候群」という論文です。自閉的特徴を持つ人々が典型的な自閉症以外に多く存在し、それらの人々に支援の手を伸ばそうという発想で書かれました。

カナーとアスペルガーでスタートしたのですが、アスペルガーのほうは論文をドイツ語で書いていますから、英語圏を含めた世界にはカナーのほうがすぐに広まりました。アスペルガーの論文については、ドイツ語圏のほか、日本では比較的初期から認知されておりましたが、このローナ・ウィングの1981年の論文をきっかけにアスペルガー症候群の概念は世界中に広まっていくことになります。

さて、現在は「DSM」や「ICD-10」のような代表的な診断基準では「広汎性発達障害(PDD)」と呼ばれておりますが、もう一つ自閉症スペクトラムという概念があります。これは先ほどのローナ・ウィングが最初に言い出したことだと思います。新しい診断基準で自閉症スペクトラム障害(ASD)と呼ばれるものが提唱されようとしていますが、それは自閉症からアスペルガー症候群(特定不能の広汎性発達障害まで含む)、自閉的特徴を持つ連続体ということで、ほぼ広汎性発達障害と同じものを指しております。もう一つ、自閉症スペクトラムという言葉がありますが、これは障害という言葉がぬけておりますが、自閉症アスペルガー症候群から「健常」と言われる人々まで含む自閉的特徴を持つ連続体です。

こういう具合に概念がどんどん拡大していきますと、自閉症スペクトラム障害、広汎性発達障害の有病率というものも変わってきます。最初は1万人に2人や4人という、比較的まれなちょっと変わった精神滞滞というイメージだったのですが、現在は知的に高い人たちもたくさんいるということが分かってきています。先ほど大高先生の話にありましたように、日本では人口の2パーセントぐらいと言われております。

幼児期早期に自閉症スペクトラム障害の診断が可能になりますが、多くの場合は保健師さん、

保育士さんなどのスクリーニングを通して医療機関に来られます。要するに、乳児期幼児期においてすでに何らかの不適応を起こしているケースです。しかし何らかの特徴があっても適応のいい人たちは、おそらくわざわざ診断を受けることはないだろうと思います。それから成人期においても同様のことが言えます。ですから、実は、特徴を持っていても診断を受けていない、あるいは不適応を起こしていない人たちがたくさんいるだろうと推測できます。

次は青年期の発達障害です。ローナ・ウィングが社会性によってサブグループ(孤立型、受動型、積極型)に分けています。これらの社会性の類型によって青年期から成人期にかけての発達に、それぞれ違いが出てきます。

孤立型というのは、他人とのコミュニケーションを求めないタイプです。受動型は、自発的には求めないが、働きかけを受ければそれには応じるというタイプ、積極型は、自ら関わっていく。しかし、その関わり方がやや奇妙であるということです。

中学高校では、多くの子どもたちは落ち着いていくのですが、中には強迫症状とか摂食障害、自傷行為といった症状が出ることによって、初めて医療機関にかかる子どもたち(青年)がいます。

大学に進みますと、最初、単位取得で多少困難があります。高校までと違って、決まった勉強をしていけばいいというものではなくて、自分で履修計画を作って、それから試験においても学生同士の情報をいかに獲得するかが単位取得に非常に影響してきますから、そこでうまくいかない人もいます。それを乗り越えても卒論という大きな壁があります。卒論はテーマを決めてどうアプローチしていくか、誰に相談したらいいかとか、非常に社会的スキルが要求されるので、自閉症スペクトラム障害の人にとっては非常に難しいものです。

そこを乗り越って就職した人たちは、極端な同一性保持傾向とか興味限局などはみられなくなっていくのですが、その次に壁になるのが、

昇格や昇進です。非正規雇用だった人が正規雇用になることや、中間管理職というマネジメントをする立場になることは一般には喜ばしいことですが、ご本人たちにしてみれば、しばしば非常に苦痛なことで、責任が重くなるとそこで挫折して、医療機関に来られる方もいます。

さて、発達障害のもう一つ大きな柱にADHD（注意欠陥多動性障害）があります。成人の場合、多動が問題になるということはあまりなく、多くの場合は不注意が問題です。成人になって、はじめて広汎性発達障害の診断を受けるケースは、しばしば不注意の特徴を併せ持つことがあります。不注意のある人が就職すると、たとえば事務仕事ができないなどの困難があるのでADHDの側面も非常に重要なことです。

治療として、ここでは心理社会的治療として城山病院でのグループワークをご紹介します。

青年期対象のグループと、就労あるいは結婚している人たちを対象にした同じような境遇の人たち同士で話し合いを持つピアカウンセリンググループをやっております。こういうグループワークが有効な人たちというのは先ほどの受動型あるいは落ち着いてきた積極型の方が対象となっています。何らかの挫折体験を経て、自己肯定感を失ってしまうためグループワークを通して自分たちの誇りを回復していくことを目指しています。

発達障害は普通男性が圧倒的に多いのですが、こういうグループの場合ですと、大体男女同数近くになっているのが特徴です。対象になるのは一定の対人希求性を持っている人、それから一定の障害受容のある人です。それを前提として、こういうグループに受け入れられて、メンバーの経験を共有し、さらにほかのメンバーをサポートするという経験を経ることによって、自尊感情が高められます。

病院に来られる発達障害のある方たちが、自分は生きる価値がないというふうにおっしゃることが非常に多いことに驚かされます。ですから、そこを何とか変えられないかということで

こういう活動をしております。

名古屋市発達障害者支援センター

りんくす名古屋 山口 徳郎

山口徳郎先生発言要旨：名古屋市発達障害者支援センターの山口と言います。よろしくお願いたします。

私がここでお話させていただくことは、子どもの時期から高校、大学、社会の中に出ていったとき、どのような支援が必要で、本人さんたちがどのように工夫をしていくのか、まわりがどのような支援をしていくのがいいのか、お話ししていけたらと思っています。

私たちのところに相談にくる方たちの相談内容ですが、「就職面接が全然だめで、アスペルガーと診断されたが、これからどうしたらいいのだろうか」とか、「いろいろなことを同時にできずに仕事の上とかで失敗し、退職を迫られていて、どうしたらいいのですか」とか、あるいは「仕事がなかなかうまくいなくて上司にいろいろと責められる。どうもネットで調べていくと、自分はアスペルガーなのではないか。だから診断できる医療機関を教えてください」

後は、「日常生活の中でお付き合いがうまくできない。どうも職場の中とかで孤立しているような気がする」など、そうしたところで相談にみえる方があります。

私たちのところの相談対応のスタンスですが、基本的には電話の相談というよりは面接優先で、並走的な支援、それから複数の職員による支援、それから福祉サービスだけにこだわっての支援ではなく、若者の支援からさまざまな就労の支援も使っていく、そういう多様で柔軟な支援を行うことを心がけています。

並走的な支援というのは、引き継いだ先に対して、引き継いだから、それでお終いということではなく、その方たちが安定して生活できるところまでは我々ができることは支援していくということです。

それから複数の職員による面接、支援ですが、

結構、広汎性発達障がいの人たちも、自分なりの解釈、話の中で出てくるフレーズについて自分なりにその部分だけ読み取ってしまって、かっさに解釈してしまうというところがあるようなので、誤解を防ぐためには複数の視点による支援をしていくということは大事なのかなと思っています。

それから課題の整理をしていくためには、福祉という視点だけではなくともならず、本人の自己理解の問題、現実検討ができていくかどうかといったところも押さえた上での支援をしていかないと難しいのかなと思っています。

私どもがやっている支援を理解してもらえするために、事例を出しました。

広汎性発達障がいの方で、30歳で男性です。目の前の商品の説明ばかりをしていて、次に付加する商品はこんながありますというのができない。店頭販売の商品に、今ですと付加価値を付けて商品売っていかないとお店はもうからない。結局成果が上がらなくて、上司とか同僚が、そこは注意したほうがいいよというふうに何度も言うわけですが、それに対して売り言葉に、買い言葉的に衝動的に退職してしまったということでした。それに対する反省はみられるのですが、自分は悪くない、適切なアドバイスをしなかった上司や同僚が悪いという意識が強かったのです。

私どもに相談すれば、障がい者就労ですぐに働けるといふふうに思い込んでいるところがありました。私たちは、まず課題の整理で困っていることを、本人がどういうふうに受け止めているのかという確認をしています。

それからこれまでの職歴からみえてくる他者の評価はどうか、あるいは仕事に対するこだわり、中身に対するこだわり、お給料に対するこだわり、それから身分などに対するこだわりというのをチェックします。それから仕事上の配慮が必要なかどうか、自分でどう思っているかということの確認もします。

2点目に障がいをオープンにするかクローズドにするか、そのメリット・デメリットの話

し、それから自分でできる職務遂行上の工夫についてのアドバイスもさせてもらいます。

続いて支援機関の説明をして、面接の資料を作成して、支援機関にそれを引き継ぎ、その定着に向けて支援機関と連携をしていくということをしています。

課題の整理という部分は要するにアセスメントで、いろいろなチェックシートを使っています。障がい者職業総合センターの「発達障がいの方の就職支援ガイドブック」のチェックシート、それからジョブコーチネットワークが作っている「発達障がいの就職就労相談ハンドブック」のリラクゼーションや、ストレスマネジメントの評価のチェックシートです。

ご本人とのやりとりは、ホワイトボードとか視覚的に整理できるもので確認しながら、記録を残してお互いに確認していくことをやっています。それから、電話対応をするときには、話し込むということは避けています。極力、事前に1時間なら1時間、30分なら30分ということは伝えていきます。

又これから先、どういうふうにあなたに対して支援を行っていったら、その相談のテンポはどれぐらいかかるか、それを待てるか・待てないかということも確認し、選択してもらっています。

それから支援機関の情報の説明というのは、できるだけパンフレットとか印刷物を使って、視覚的に行うようにしていますし、情報はA4 1枚でまとめるような形にしています。

そのうえで本人支援のキーワードを四つほど挙げます。

「障がい受容と自己理解の確認」、「現実検討と折り合い方への助言」、「支援を受けることへの自己決定の確認」、「必要な支援情報の提示と適切な引継ぎ」ということです。

まず一番目の「障がい受容と自己理解の確認」では、障がいの内容、障がいが自分の生活に及ぼす影響について説明をしています。

「現実検討と折り合い方への助言」のところでは、自己評価と他者評価にはギャップがある。

そのところで自分ができる工夫はなんだろうかについてお話をします。

「支援を受けることへの自己決定の確認」のところでは、支援内容の説明を行い、本人の理解度やモチベーションに沿った決定ができるような促しをやっていきます。

「必要な支援情報の提示と適切な引継ぎ」では、支援機関同士で果たす役割分担が明確にできるような連携づくりに努めています。

さて事例2ですが、親からの相談で、アスペルガー症候群の方です。小・中と普通学級、高校進学の時も、大学の進学の時も、親御さんが事前に学校とか、学生相談室に本人の情報を伝えて、本人が苦手なことを避けるように配慮してもらってました。

高校の進学の時主治医から障がいの告知をしてもらって、本人も分かったと言いました。

親が就職先の選択の相談にも乗って、面接の一问一答のシナリオを作って協力し、現業系の業務に一般就労しました。でも、会社の実際のチームの中での報告・連絡・相談ができなくて、仕事上のミスを連発してしまい、その言い訳が「僕はアスペルガーですから」というものだったので、現場の人たちが反発した。親として居づらさを感じたので、自己都合退職をさせたので今後について相談したいということでした。

私たちは、親御さんにまず「本人は相談する意欲があるのかを確認し、本人から電話をするようにしてください」と言います。

それから親御さんには、今後に対する思いを確認し、どうしたことがここでお手伝いできるかを伝えます。

本人に意欲があれば電話がかかってくるわけです。本人からの電話ではその時に困っていることは何なのかを聞き、私たちのような相談支援機関とやってみる意欲はあるかということの確認をしたうえで、意欲がある場合に面接につながっていきます。

具体的な支援内容のところでは、バイト探しを自分でしてもらって、実際にバイトに就いてもらう。そうするとやはりうまくいきません。

そのうまくいかないときに障がい特性についての話をした上で、実際に主治医に説明を聞くようにという促しをします。そのうえで自分の苦手なこととか困ることについて、まわりの人とのやりとりや段取りの悪さなどについて、どういう対応をすればいいかということを整理し、場合によっては、若者サポートステーションとかのSSTサークルなどを活用して、実際に振舞い方などについての支援の必要性を理解してもらったうえで、福祉サービスにつなげていくというような形を取っています。

家族支援のキーワードとしては、「障がい告知と本人の自己理解の見極め」、「小さな失敗体験の大切さと実際の支援の工夫」、「適切な支援情報の引継ぎ」、「子離れと親の役割の確認」という四点を挙げています。

一番のところではやはり本人が受容できるまでのフォロー、それは1回の診断と診断名が告げられたということだけでは難しいので、その後、親やあるいはまわりの人たちは本人が理解できるまでフォローをしていくしかないと思います。

それから、実際にこのケースの場合は親御さんが先回りして困らないようにという形で動いているのですが、社会の中での周囲の見方、折り合える程度といったものを知ってもらうための機会は設定しなければいけない、小さな失敗の体験というのは大切だと思っています。

それから、進学先やあるいは福祉関係のところに情報を引き継ぐときに、どこがこの人に対してサポートするというのかという支援の情報を引き継ぐということは大切だと思っています。

それから、発達障がいがあっても「親が守る時期」と「社会に巣立っていくための手伝いをする時期」というのを、親のほうに知らないといけないだろうと思います。子どもが社会的に自立していくまでの自覚を巣立つまで待つということの理解をしてもらうということが大切だと思っています。そのうえで支援者が押さえる視点として、一つは、「自分一人で解決しようとしなくてほしい」ということ。それから、

もう一つ「付かず離れずの支援をしてほしい」。この二点は強調させていただきたいと思います。

「大学に入学すること、社会にでること」

日本福祉大学 学生相談室

若山 隆

若山隆先生発言要旨：ご紹介いただきました、日本福祉大学の若山と申します。

20年前今でいう統合失調症の学生さんを紹介されました。何とも不思議な学生さんで、最初に出会ったとき、この学生さんは大相撲の番付表に出てくる力士の名前を全部空で言うので驚きましたが、その後も自分の関心のあるスポーツなどについてすごい記憶力を持っていました。

授業のないときは私の後をくっついてくるような学生さんでしたが、卒業まで何度も休学と復学を繰り返していました。私は面接で何とか彼の心にふれようと思いました。私は面接で何とか彼の心にふれようと思いましたがなかなかうまくいかず、ゲームをやったり、プラモデルを一緒に作ったりしました。勉強を一緒にやったりもし、何とか卒業にたどり着きました。今はときどき調子を崩しながらですが、作業所に通っておられるそうです。

ずっと振り返ってみると、統合失調症でなく躁うつ病とか、人格障がいとか、神経症とかそういう診断が付いた学生さんのうち、かなりの学生さんが発達の問題を抱えていたように思います。当時、不思議だったり、理解できなかった彼らのことも、発達障がいのことを学んでいくうちに合点がいくことも多くあって、当時の対応について悔いが残る例も何ケースかあります。

現在大学への進学率が5割を超えるようになり、入試も多様化して、試験科目も2科目3科目と少なくなって、凸凹の凸ができれば入学できる。あとOA入試とか推薦入試とかその気になれば入れる大学は多くなっていると言えます。

それから、就職が厳しくなり、各大学も就職支援に力を入れはじめたところ、対人関係能力

やコミュニケーション能力が最重視される就職活動が上手くいかない発達障がいの学生さんがあらためて気になってきた、見えてきたとも言えると思います。

また大学の外からの影響をみますと、やはり発達障害者基本法と特別支援教育が始まったというのは大きかったと思います。発達障害者支援法には、「大学・高等専門学校は発達障害者の障害に応じ、適切な教育上の配慮をするものとする」。また文科省も、「発達障害のある学生に対し、障害の状態に応じて、たとえば、試験を受ける環境等についての配慮や、これらの学生の学生生活や進路等についての相談に適切に対応するなどの配慮を行うこと」とあります。当時仲間と大学にも特別支援教育の時代がくるのかなあなどというのを話したことを覚えています。

不思議なもので、その後かかわる学生さんがみな発達の問題を抱えるように見えるようになり、実に多様な学生さんと会って、さまざまな対応してきたと言えるのですが、現在私の会っている学生さんの、3割ぐらいが何らかの発達の問題を抱えていると見ています。

対人関係、社会性の問題を持つ、アスペルガーなどの学生さんは、得意不得意が大きくあって、まず学業の問題が出てくる。そして、深刻なのは入学前までにいじめ等にあって、それで抱えた二次的な問題、つまり、根深い人間不信、自傷行為、不登校、うつ症状等々、そういった問題等が彼らの大学生生活に大きな負の影響を及ぼしています。

この前卒業生とお会いしたのですが、「大学生になって過呼吸という方法を覚えた。すると、皆が優しくしてくれたりして嫌な場面が回避できるようになったのでこれをずっと使っています」と話をされていました。「解離」を覚えたという学生さんもおられました。

私たちの基本的な視点については富山大学の先生方が出された、「発達障がい大学生の挑戦」という本に書かれていることが大変参考になりました。そこには「発達障がい大学生をエンパ

ワーメントすることで、自己肯定感を高め、自己理解受容を促進し、技術的に社会に参画していくための、基盤作りを支援すること、これが支援のポイント」だとあります。

また、「発達障がい大学生の持つ能力が発揮され、努力に見合った成果を出すことが、できるようにするための環境作りをすること。」これは合理的な配慮の問題と言いますが、この二つが私たちの支援におけるポイントだと思っています。

大学での合理的配慮というのは、実習内容、授業、評価基準、活動等の本質的なものを変えないで、障がいを持たない学生と同等に、教育に参加できるための配慮、または措置を柔軟に対応することを言います。

ここで、例として、発達障がいの学生が、進級卒業に向けてつまずくところを、紹介してみたいと思います。

まず履修登録を間違いなくすることが大事なのですが、期日に遅れるとか、思い込み登録で単位が足りないという失敗がよくあります。

また、教室で授業を90分受けることが大事なのですが、30分ほどしか座ってられない学生さんがおられますし、朝起きれないという学生さんも多くいます。教室の教師の声も学生の私語も区別がつかず、音に敏感で落ち着かないという学生さんともお会いしました。

それから、必修科目で卒業に必要な科目の単位をとること。これは、期末試験・筆記・レポートがあるわけですが、興味がない、苦手とする科目の単位がとれない。とらないと卒業できないことが決まっていますが、とらないという学生さんがみえます。

そこで、どんな対応をするかということ、たとえば朝起きられなければ、午後からの授業をとるようにする。

また、同じ科目が、午前中と午後とかに分かれてありますと、午後からとれるようにする。講義は半期で15回中、10回出席しなくてはいけないのですが、8回まででもOKだというような配慮をした、個別支援計画というものを教

授会に提案して決定し、公に配慮を実施することがあります。

ところが、私たち相談室の相談員がこの個別支援計画というのを見ると、ちょっと堅苦しいという思うところが出てくることがあります。

従来は統合失調症の学生に対しては生活臨床的に卒業イコール治療的だというふうに、私は信じていまして、科目担当の教員たちを説得しまして、個別にお願いをしてきました。先生が単位を与えてくれるということが治療になるのですとお話すると、それに乗ってくれる先生がおられました。

非常に柔軟で、オープンではない方法でだいぶやってきました。

それが個別支援計画の作成実施になりますと、オープンなのですが、私たちの出る幕がなくなってしまうのです。

発達障がいそれから、気づかれずに大学まで来た未診断の学生が大勢います。自己理解がなく、野菜が嫌いなのに八百屋さんに就職してしまったという、学生さんもおられました。

それから診断だけ受けて、支援の機会がなかった学生さんは自己理解が進んでいるとは限りません。

苦手を克服しようと、アルバイトに挑戦したり、資格があったらいいということで、資格取得に挑戦する学生さんがいますが、膨大な手間をかけたのに、結果的に自信をなくしてしまうということがよくあります。就活の問題でいえば、ご存知のように知的な高さイコール安定した就労とは限りません。

経験したことじゃないと分からないし、練習しなかったことは、たとえ大学に行っても分かりません。同時にそのことを並行して行なうことも苦手です。

大学出身がマイナスになることもあります。工場のラインにどうしても入りたいという学生さんがいましたが、会社の社長さんは「君は大学卒業して、えらいんだから、こんなところもつたいないんだよ」というふうに、断られたという話があります。

入社してからの苦勞もあります。障がい者雇用で就勞の学生さんも、不安定な雇用形態になっている方が多いようです。

ここから大学がどうなって行くといいかなという、私の試行錯誤というか、願望が色濃くはいつていることを、報告できたらと思います。

卒業を目標とできない、しない学生の支援ということです。高校卒業後に社会に居場所がない場合、親たちの願いと先ほど触れましたように学生数を確保したいという大学とめぐり合うと、入学できる場合が多くあります。そういう学生さんでも、授業にコンスタントに出席できて、課題の提出や試験も親や友人たちの全面的支援があれば、卒業までいたる学生さんも多いことでしょう。

大学の教職員は、健気で、一生懸命やっている学生には、何とかしてあげたくなるものです。しかし、授業に出られないとか、対人トラブルなどを頻繁に起こしてしまう学生さんなどは厳しいことを言わざるをえない。尊大に見えたり、横を向いて座ったりしてるとか、刺激を避けるためにヘッドフォンなどをして工夫をしているのに、態度が悪いかと思われ、おまけに何でそうしているのかという説明がうまくできないので、乱暴な言葉になったり手足が出ることもある学生さんというのは、大学に呼び出されてしまうこともあります。

親御さんからは、合格して驚きましたとか、大学にはいつて高機能であることが証明されてよかったとかいう声が聞かれます。教職員には、入学は認めただけれど、卒業を保証したものではないという、声もあります。大学ではなにを目標にするのか、大学は社会に出るまでの暮らしを提供するところなのか。それとも、大卒こだわらず就勞支援をしていくのか、大変難しい問題だといえます。

一人の事例ですが、普通高をなんとか卒業して、大学の授業についていけない学生さんがいました。人当たりもよくて性格的にもバランスがとれていて、部活を一生懸命やり友達も多かったです。アルバイトも独居生活も一時的に経

験しましたが、単位はとれませんでした。親は卒業、そして資格取得にこだわりましたが、手帳を持っておられたということもあり、理解のある職場が見つかり、卒業はできませんでした。卒業式には仲間とともに出席され、親御さんも参加されていました。

最後に大きく言ってしまえば、大学改革ということになるのですが、卒業をめざして決められた履修科目を決められた期間に決められた時間を受け、決められた単位をとることが本当に大切なのか、単位をとり卒業するために膨大な力を使うことが本当に意味があるのか。私は、学業や単位を取る方だけの為でない個別支援があるのではないかと考えています。

大学にある多様な資源を活用し、彼らが社会へ出て行くための準備期間として、大学に在籍する時間を有効に活用してもらえるように支援ができるのではないかと考えています。

例えば、入学して半年の試行錯誤と、半年の合理的配慮の期間で様子を見て、本人の好きな科目や社会に出るまでの有効な科目等によって構成されるカリキュラムを作ったらどうでしょうか。

学内でもアルバイトというのもあります。また今日ここに来られた、地域で支援している方々との連携というのを進めていけたらと思っています。

**NPO 法人障がい者自立支援センターなごや
就勞移行支援事業所「マーム」**

山崎 尚樹

山崎尚樹先生発言要旨：今ご紹介いただきました、就勞移行支援事業所マームの山崎と申します。貴重な時間ありがとうございます。

今回私は発達障がいを持つ青年の社会復帰支援を考える上でマームでの実践を交えながら、就勞支援の立場でお話させていただきたいと思っています。

ちなみに、就勞移行支援事業所は、名古屋市内に現在 31 箇所ございます。定員は全部で

400名の方の受け入れが可能になっています。また、全国では現在約2100箇所あり、名古屋市内ではさらに就労移行支援事業所が増加の傾向にあります。それでは本題に入ります。

まず大きなテーマとして、生きるための手段としては何を選びますかということ挙げさせていただきました。どの子も大人になり、生きるための手段を、選ばなければいけない時期がやってきます。それは特別ではなく誰にでも訪れる時期です。

その生きるための手段として、いろいろありますが、その中で「就労」ということを選ぶと、まずそのための準備が必要になります。

では、いつからどんな準備をすればいいのかということになります。まず準備は早ければ早いほど、後々の苦労は軽減されます。

就労ができる年ごろ、たとえば、高校卒業、大学卒業という時期になってから、準備をしては遅すぎるのです。進路対策は早期からをモットーにしてください。

次にどんな準備が必要か。準備の内容は皆さんそれぞれありますが、簡単なところで、挨拶返事ができるようになっておく。丁寧に字が書けるようになっておく。あとは、相手に伝わりやすい言葉を遣う。などがあげられます。しかし今回は、私の経験上からあげさせていただいた「準備」を二つ用意しました。

まず、必要な準備その1として、親と子の気持ちの一致があります。親御さんの無理な期待が、お子さんを苦しめる結果となり、就職する上での障壁となることがあります。親御さんの期待に応えようと、無理に背伸びをして就職しても、長続きしません。頑張れ頑張れと背中を押すばかりではなく、今ちょっと疲れているなと感じたら、早めの休憩が大切です。たとえば今土日はお休みなのですが、金曜日もお休みをとっていただいて、金、土、日と、3連休をとってゆっくり休んで、気持ちの整理をして、また月曜日から就労に向けて取り組むということも大切ではないのかと思います。あと、親御さんが「あなた、絶対に正社員よ」と希望するケー

スもありますが、雇用形態も、パートであっても、よい条件の求人はたくさんあります。パートと正社員というのは正確に法律で定められてはおらず、特に言うならば、正社員の方は退職金があるとか、昇給がパートの方よりも高いとかその辺のところで、将来性のある企業を選ばれることがポイントではないかと思います。

実際、障がい者雇用では、正社員は狭き門になっています。

一般企業の人事の方にお話を伺うと、現在一般の正社員の方を、減らしている現状で、新たに障がい者の方を、正社員として雇い入れることは難しいといわれます。そこで、今私どもは、企業さまにお邪魔したとき、スタートで基本給を少し下げていただいて、障がい者枠の正社員というのを、新たに作っていただけませんかと提案しています。

やはり、他の正社員の方と同じ給料で仕事をしていますと、「なぜ同じ給料で彼の方が仕事が少ないんだ」とかいうことも出てきます。その辺は基本給で下げてあとは本人の努力次第で、昇給をしていくというかたちを作ってほしいと企業に提案しています。

次が必要な準備その2として、自分自身のセールスポイントとウィークポイントを知ることです。

セールスポイントというのは皆さんお分かりのとおり、「これに自信があります。私に任せてください」と言えるところです。ウィークポイントというのは、「これが私の苦手なところです。誰かに助けてもらえると安心です」と思うところです。

まず自分研究をし、誰よりも自分のことをよく知る必要があります、そしてそれを、相手に伝えることができるのと更にいいのですが、コミュニケーションや表現方法などを考えるとご自身で伝えることは難しいかと思います。

このへんのセールスポイントとウィークポイントがご自身で把握できていると、企業に就職する際に、しっかり企業の方に自分のことをお伝えできると思います。

そして、マームでは、準備のお手伝いとして、いろいろなことを行なっています。

就職したら支援が終わりではなく、定年までずっと長いお付き合いをさせていただく必要があると思います。目の不自由な方に、盲導犬や白杖、手や足が不自由な方に車椅子などがあるように、発達障がい、アスペルガーの方には、支えになる人財が必要だと考えます。

企業の方に対して、セールスポイントをご自身でアピールし、ウィークポイントの配慮して欲しいところを伝えるのですが、もしご本人で十分に説明しきれないところがあれば、支援者が補足して、説明すればいいんじゃないかと思えます。ですから、就労には支える人財が大きく影響していると考えます。

次に取り組みその2として『マームミーティング』を行なっています。そのミーティング内で八つのルールを作りました。

その中で三つコミュニケーションに関係があるものを挙げさせていただきます。「人の話を聞くときは、目を見て体を向ける。」「相手のことを考えて話をする。」「状況に合わせた態度をとる。」これは訓練生の皆さんに出していただいたものです。出していただいた後に、なぜこういうことをルールにしないといけないのかということ皆で紐解き、ルールとなりました。そのときのコーチングが、職員の役割だったと思えます。

発達障がいの多くの方は、対人関係を苦手とされています。だからといって訓練の対象からはずすのではなく、ミーティングを通して学んでいただきたい。ロールプレイも行なっており、SSTほど堅苦しいものではないのですが、よい見本を見て同じようにまねることで対人関係で必要となるスキルを自分のものとして定着してもらいます。

そして対人関係に自信を持っていただき、自信が笑顔につながっていきます。

そしてお礼の仕方も重要です。たとえば「今日きれいな服を着ているね」といわれたときに、どうしてもその場で「あっ、あっ」と、止まっ

てしまう方が多いのですが、そこで一言「ありがとうございます」という言葉が出ると、言った方にも分かってもらえます

訓練生に自閉症の方、知的障がいの方もお見えですから、アスペルガーの方に、「ちょっと見本を見せてもらっていいですか」とお願いします。今までの経験から、上手にお手本を見せてくれます。

役割を持っていただくことで、自信をつけていただくことが重要なのだと思います。アスペルガーの方が、マームに入所されると不安もあり、とても表情が堅く、常に緊張してみえます。しかしミーティングを通して、人と触れ合ってもらっていただくことで、笑顔も出てきます。

人との触れ合いが嫌ではなく、苦手なんだと気づきます。

次に私がかかわった方で、こんなことがありました。

就職の前に実習を行なうのですが、会社の方から「今日から始まる職場実習で、あなたがここで働きたい気持ちを確認させていただきます。期待していますので、一生懸命頑張ってください」というふうに声をかけていただきました。この「一生懸命」という言葉がとても漠然とした言葉です。

この方はここでぜひ就職したいという思いから、「一生懸命頑張りたい」というお話をされていました。何を頑張ったかといいますが、まず、誰よりも早く行動しました。又間違っただけをされている方に、直接注意をしました。この方はご飯を皆さんと食べているときに、音を出しながら食べている方に気づきました。それが他の方に迷惑だと考え、直接注意をしました。それから、与えられた仕事を責任を持って取り組みました。しかし残念なことに企業の方には、「誰よりも早く行動する」ことは「自分勝手に動く」、「協調性がない」ととられてしまいました。それから、気になったこととはいえ実習生が直接注意したということで、「いわれた人の気持ちが分からない」。それから与えられた仕事を責任持って取り組むということで、「いわ

れたことしかやらない」「積極性がない」と評価されてしまいました。企業の方からは「本当にうちで働きたいのですか、あなたからは一生懸命さが伝わってこない」と言われました。

彼にとっては一生懸命頑張ったので、大きな声を出して、「なぜ一生懸命ではないって見えるんだ」と会社の方に言ってしまいました。支援者がいないと本来であればここで終わってしまうのですが、今回支援者がついていたので支援者から補足の説明を入れさせてもらいました。なぜ彼が、このような行動をとったのかということ、ことこまかく説明しました。

その結果会社の方から、「仕事はできるのですが社内の輪が乱れてしまうことを、心配していました。しかし彼なりの一生懸命さが理解できました。社内の方では私が支援者となって彼を支えていきます」というお言葉をいただきました。

職場定着支援のサービスはここで終わりではなくて無限につながって行くと考えます。今も彼は紆余曲折あります。「電話対応ができない」と彼はいていたのですが、会社の方もステップアップを考えて、少しでも仕事にやりがいをもてるようにと思い、「電話対応の練習をしてみましょう」という提案が出されたのですが、やはり練習がうまくいかず、また彼は「何でこんなことさせるんだ」と、会社の方に大きな声を挙げてしまったわけです。そこでまた支援者が会社の方、ご本人、それから親御さんにお話しすることで、次のステップを目指しました。

まとめとしてご本人がどれだけ頑張っても、限界があります。就労は生活を楽しくするための方法の一つです。その就労が辛いことばかりで、生活の全てを台無しにするようでは、本末転倒だと思います。生きるための手段として就労を選ばれた方は、ぜひよい支援者と出会っていただきたいと思います。支援機関は「マーム」のような就労移行支援事業所だけでなく、ハローワークもごございます。名古屋市内のハローワークは3箇所ございますが、その中で、中職安と名古屋南職安。特に南職安では、若年

コミュニケーション要支援者相談窓口を、設置しています。ここは手帳をお持ちでない方であっても、相談を受けていただけます。いろいろな困りごとを聞いていただけますので、ぜひハローワークもご利用いただければと思います。ご清聴ありがとうございました。

最後にうちのマームの職員は今8名でやっていますのでよろしくお願いいたします。本日はありがとうございました。

(休憩)

座長(大高):最初にいろいろな議題が出たので、それをまとめる意味で、名古屋大学医学部附属病院、親と子の診療科の吉川先生に指定討論者として、今回のシンポジストにそれぞれ質問をしていただければと思います。よろしくお願いいたします。

指定討論者

名古屋大学医学部附属病院

親と子どもの心療科 吉川 徹

吉川徹先生発言要旨:先生方のお話をお聞きしながら、必ずしも就労を目指さない社会復帰の支援というのは、どんなことなんだろうかと考えていました。

これはやはり動機付けということになると思います。生きがいとして就労を選ぶ、あるいは就労ではない生きがいをきちんと持って、その上でそれを通じて社会復帰するために何が必要なかを考える必要があります。

発達障害を持つ人はその特性のために、あるいはその特性を持って育っているために、生きがいが見つかりにくく、その芽が摘まれてしまいがちなのではないかとも思います。こうしたことを念頭に、先生方にご質問をさせていただきたいと思います。

大村先生のご発言の中に、自分には生きる価値がないと感じている方が多いというお話がありました。グループワークを通して生きる価値、生きがいを取り戻していかれるというお話が大変印象的でした。大村先生には、なぜグループ

ワークによって生きがいを感じやすくなっていくのかということ、もう一つは生きがいを取りもどした後に、次のステップとしてどんなところにつながっていけるのだろうかということをおうかがいしたいと思います。

山口先生のお話では折り合いをつけるということを非常に強調されていたことが印象的でした。

支援機関につながる前のところで、「まず支援を受けたい」という気持ちが育ってくるために、折り合いというのがすごく大事になってくるのかなと感じました。ただ一方で、ここで折り合いをつけるのと一緒に気持ちまで折れてしまい、あきらめてしまうと、支援にはつながらないということになってしまいます。それでもやっていきたいと思う気持ちを支えるために、どのような工夫しておられるのかをおうかがいしたいと思います。

若山先生のお話の中で卒業を目標にしない大学での支援ということが、とても新鮮で興味深くおうかがいました。

大学関係者や親だけでなく、ご本人自身も必ずしも卒業を目標にしていなくてもかかわらず、大学に通い続けたいというその気持ちをどのように支えておられるのか。そこで実際されているのがどんなことなのかをおうかがいできればと思います。

山崎先生からは、就労に向けての準備という点も強調してお聞かせいただきました。

この中に、気持ちの準備ということも入ってくるのだらうと思います。「生きるための手段として就労を選ぶ」という言葉を使っておられましたが、どんな準備や支援があれば生きるための手段として、「就労を選びたい」と思えるのか、ということをお聞かせいただければと思います。先生方よろしくお願ひいたします。

座長(大高)：それでは大村先生から順番によろしくお願ひします。

大村：発達障がいをもっている青年は、自分が生きる価値があるのかどうかという悩みを持っている人たちが多し。そういう人たちにグルー

プワークがどういうふう生きる価値を感じるために役に立つのか、より感じやすくなるのか。というご質問が最初のご質問だったと思います。まずグループワークが発達障がいを持っている全ての方に有効だとは思っていません。

最初の問題提起でもご紹介しましたがけれども、一定の対人希求性といひますか、人とかかわりたいという気持ちを持っている人。積極型及びただしある程度受動的になってきた積極型でない、グループワークにはなかなかなじめないのです。それから受動型の方、受動型の人には積極的には求めないけれども対人関係を拒否しているわけではなくて、実は求めている部分があります。一方、孤立型の方に対しては、グループワークはなかなか難しいと思ひます。

受動型および一部の積極型の方に対して、ご本人の生きる価値の自覚につながるかということ。まずこういった方たちは、仲間に受け入れられたという体験をなかなか持てない。学生時代や、就職してからもなかなか仲間に入れな。特によく聞かれるのは、仕事している間にはいいのだけれども、休憩時間中の雑談に入れな。そういうところで疎外感とか孤立感を、あじわっているようです。

このグループワークではそういう人たちが仲間として受け入れられていく。グループワークでは、支援するスタッフが必ずはいって、お互いのサポートをして行こうという雰囲気を作ることを心がけています。

その中で、他のメンバーからサポートを受け、本人が他のメンバーをサポートすることができる。何か支える言葉をかけることによって、本人も他のメンバーを支えることができたという体験がもてるというのが、非常に重要なのではないかなと思ひておひます。今の例は成人のグループで顕著に出てくるわけですが、若い人たちを対象にしたヒアリンググループといわれるものでも基本的には同じようなことが起きているのではないかなと思ひておひます。

次のご質問は次のステップはどうなるかということですね。

これはとても難しいことなのですが、就労につながる人、あるいは就労を続けられる人、そういう方もいらっしゃいますし、そういう方にとってはそれが次のステップになるでしょう。ただその場合でも、時々グループに帰ってこられたり、それからもう一つこのグループを補完するために、ソーシャル・ネットワーク・サービス、SNSと呼ばれるインターネットのサイトを開いています。グループには参加できなくなったけれども、そちらのサイトに時々戻ってこられているような経験を共有していらっしゃるという方もいます。

ですから完全にグループから離れずに、うまく利用される方もいます。それから、もう一つの試みとして、ご家族のご要望が大きかったため家族のグループも作っています。特に孤立型の方をサポートするには、家族が来るというのは非常に有効かと思っています。

たとえば、芸術面で非常に優れた能力を持っているのだけれども、就労するための最低限の社会性というのがどうしても身につかないという方が見えます。

そういう人たちは、気が向いたときにたとえば絵を描いたりされているのですが、そういう方を支えるというのは家族を通して支えるという方法が有効かと思っています。ですから、グループあるいは家族のグループを通して、次のステップ、そのグループ以外の場面でのご本人たちの生き方を、支えるかたちになっているかなと思っております。

山口：折り合いを付けてでもやっていきたいという気持ちを支えるには、どうしたらいいかということだったのですが、アセスメントの中で困ることをはっきりさせます。その代わりに、本人が得意なこと、できていることは必ずあるので、そこはどうやってうまくできたのだろうか、そういったことは聞き出します。その上で、そこは一生懸命褒めます。

では困っていることを、周りの人はどう評価しているのか、自分はどう評価するのか、それに対する対策はどういうのがあるのだろうか。

そこを踏まえたうえでたとえば働くなら働く、学生なら卒業についてどういうプランを立てていくのか、それが実現できるだろうかをできるだけ本人が理解できる形で話をします。

ここで我々の説明がまずければ分かってはもらえないですし、理解しづらい方が中に見えるので、うまくいかないときもありますけれども、そこは支援者の力量だと思います。あとは本人のできることにについて、できた工夫を確認していく中で、評価する事がプライドを高めることになる。ちゃんと認めてあげるということですね。プラスして、楽しみを持っているのだったら、それを実現できるように働いてお金を使うようにしようよということでエンパワーメントするように心がけています。

若山：大学というのは卒業すること、就職することで体系化され、全てがそこに収斂してくる感じがします。卒業できなくても、居続ける学生さんがいる。結局、6年から7年いて、膨大なエネルギーを使って、卒業できなかったりとか、就労できなかったりしていて、痛ましいのを感じていました。しかし、卒業を目標にしないと彼らは、4年間で大学を出ていくもんだと思いました。ひたすらゲームを大学にしにきたり、音楽をひたすらしにきていて、ストリートミュージシャンになるといってこられても、4年間もの間にあきらめられたりとか、友達ができおもしろかったという感じで過ごしている間に、家族も本人も自分なり決着をつけて、結構4年間の間に出て行かれる学生もいました。

大学の教育の敗北と言われたかも知れませんが、けれども学内で議論したいと思っているところです。

山崎：皆さんは今まで、小中高、中には大学まで出られて、やはり次の進路として就労を考えます。進学したら就職というのが一般常識のような感じで、世の中に流れています。皆さんに将来の夢を聞くと、結婚したい、家がほしいなど言われます。やはりそうなるとお金を稼ぐ必要があります。

収入を得るためには、障害年金とか、生活保

護ということもあるのですが、やはりそれでは夢をかなえるまでの金額を得ることはできません。やはり皆さんは就労を選ばれます。しかし、「いつまでぶらぶらしているの」と親御さん方から言われて、無理に自分で捜してきて、就職はするけれども、やはり無理をして就職しているから、すぐに疲れ果ててやめてしまう。そしてまた自信をなくしてしまう方も、たくさんみえます。そこで支援者が入って、自信をなくさないように仕事をしていていただけたらいいかなと考えます。

座長 (大高) : ありがとうございます。それではそろそろ、フロアからご意見を聞きたいと思っています。

フロア (アスペルガー症候群当事者) : あの、どうか私を助けて下さい。私は当事者で、アスペルガー症候群なのですが、この会の時間内ではなくても、時間外でもいいのですが、助けてほしい。

今私は職安から、出入り禁止の状態にあります。「あなたはどうせ仕事を紹介しても、迷惑かけるだけだから、あなたに仕事の相談はできない」そういうふうに言われています。相談機関はハローワークというけれど、それはきれごとだと思えます。他にも困っている事いっぱいあります。

まず、皆さんもご存知だと思いますが、知的障がいではないということになれば、精神の手帳になりますね。やはりそれは自分としてはショックでした。

自分が精神保健福祉手帳を持つというのは、世間の目というのもあり、あまりいいイメージではない。けれども、今の日本って手帳の種類は3種類しかないじゃないですか。身体・知的・精神しかない。発達というのはないですから、精神で取る訳です。手帳を取るかどうかというのもすごく迷いました。いろんなところに、相談しました。精神保健福祉センターにも行きましたし、主治医にも相談しました。

社会復帰、社会復帰というけれど、なにを持って社会復帰とするか、それ自体漠然としている

ではないですか。手帳は取ったけど、障がい年金の方は取れませんでした。

今無収入で、職安から来るなといわれて2年が過ぎました。発達障がい者支援センターも行ってみだし、障がい者職業センターも行きました。「手帳を持っていれば支援はします。しやすいです」といわれますが、「支援しました。はい、終わりです」という感じで、全然就労につながっていません。それから名古屋市と名古屋市以外の愛知県で、すごく差があると感じます。特に交通費です。行くだけでも交通費がかかりますし、愛知県の発達障がい者支援センターは、すごく不便なところにあるじゃないですか。私も4ヶ月くらい待って行ったけど、今山口先生のお話して下さったような、あんなきめこまかいようなことは、何もなかったです。

私は就労が目標かどうかというのは、疑問に思うけれど、結婚ということを考えると、山口先生もおっしゃいましたけれども、やっぱり正社員じゃないと難しい。勿論恋とかというのは、突然好きになっちゃうものですから、そうなったときにじゃあ結婚考えて、お金が必要で、働いていないし、社会的地位もない。ということになるとものすごく落ち込んでいきます。

すいません。長くなってしまって。マームさんのお話聞いていて、大変分かる場所もあったのですが、おっしゃることは分かるのですが、でもたとえば、取り決めがあって、人の目を見て話すとか、体を向けるとか、その場にあった振舞いをするとか、相手のことを考える。これって、それができたら障がい者ではないんじゃないかというのが私の感想です。それができないから苦しいのであって、それができないから発達障がい者なのではないか。まったくできないというわけではないと思いますけれども、なんかそれができないから、息苦しいのに「それをして」といわれるとつらいです。

もう一つありました。今はこんなのですが、大学のときは成績良かったです。学科も首席で出ました。ところが卒論用の論文は書いていません。論文を書かなくても、卒業できる学科と

いうのが存在しますので、そういう学科が、私の興味と一致したので、そこに進学していました。すいません、長くなりました。

座長 (大高) : 当事者の方からとても重いお話を伺ったのですけれども、シンポジストの先生から、何かご意見とかありますか。一つ一つの質問が、本当に今すぐにここで答えられるようなことではないのですが、おそらくあなた自身がすごく孤立しているというか、一人ですごく悩まれていたのだと感じます。これはさきほど、吉川先生がいわれたような「生きがい」にもつながることだと思うのですが、人と人とのつながりの中で、生きていくことというのが、すごく大事だと思うし、その中で私たちの支援というものを考えるべきだと思っています。今日答えは出ないけれど、何らかの支援というのを広がっていくようにできればいいなというふうに思いました。

フロア (アスペルガー症候群当事者) : こまかく分かれすぎていて、細分化がされすぎていて、私から見ると全然連携ができてないのが現状ではないかと思います。

座長 (大高) : ありがとうございます。他の人たちからも意見を聞きたいので、他のフロアの方たち、ご質問とかありませんか？ ご意見でもかまいません。

フロア (当事者家族) : 質問でもいいですか。

座長 (大高) : はい。

フロア (当事者家族) : 私は家族に当たります。

漠然としていて、分からないのですが、多分発達障がいの子供だと思っています。5年間家から出ていません。でも、家事は、私の代わりにご飯作ったり、近所のお寺に掃除に行ったりとか、そういうことはできます。今後段階的にこうこうという先生方の話は受け止めれるのですが、まだそこにも達していないぐらいのレベルで、なにをどうして家族としてやってあげたらいいのかが分からないのです。

座長 (大高) : どうでしょうか。5、6年ずっと閉じこもっている、おそらく発達障がいだと思われる青年に対しての、支援はどうあるべき

かということについてどなたか。

吉川 : 自分は発達障がいの方、特に自閉症スペクトラム障害の方の場合に目標となるのは、私は実は「家事をするひきこもり」だと思っています。そこが目標で、それ以外はオプションだと考えています。基本的に必ず人と関わって暮らしていかなければならないとは僕はあまり思っていません。まず「家事をするひきこもり」、もう少し進むと「家事をしてお小遣いをもらって買い物に行くひきこもり」というのが次のステップです。

今、家事ができているというのはとてもすばらしいことで、家の中できちんと役割があるということですし、今後お父さんやお母さんがだんだんと年を取られて体がきかなくなってくると、家の中で家事をしてくれる人の役割は、どんどん大きくなっていきます。

根っこのところを、「家事をするひきこもり」ということに置いて、そしてそこでまずはOK、とそのように考えておかれるほうが無難であると思います。それがその次のステップの基盤になるのではないかと考えています。

座長 (大高) : 私も外へ出ることをあまり重要視するよりも、先ほどのシンポジストの方の言葉でいえば、エンパワーメントと言われたけれども、自己肯定感、セルフエスティーム、どんなことがあってもやっぱりそれを乗り切っていく自己肯定感みたいなものをどうやっておうちの中で作っていくのかというのが一番大事なことになるかなと思っています。

発達障がいかが分からないというご家族が相談に来られるケースを時々見ます。その時にまず朝起きることと夜寝ること、そんなことが普通にできているのか。実際に仕事に行くとか学校に行く前に、家事等うちの中のことができているのか。そういう小さなことを認めてあげていることから始まっています。

小さな成功体験が自己肯定感を生んで、その自己肯定感がその次のステップに。でも決して今の日本みたいにどんどん右肩上がりに上がっていくと考えるよりは、そのことができること

をこちらが待ってられるか、そしてこちらがそれを喜んで見ていただけるかという「待つ」という力がものすごく大事だと思います。

私は最近「ひきこもり、という言葉は嫌いだ。冬眠する熊だ」と言っています。冬眠する熊というのは、いずれ春が来れば起き出すであろう。だから春が来るのを待てるかどうかというのはとても大事じゃないのか、ひきこもりというと永遠と引きこもっていきそうな感じがする。こちらが春を信じられるか、春になったらどうなるのか分からないけれども、そういうふうに冬眠する熊が少しずつ動けることを待ってられる周囲の支援者というのがとっても大事だと思います。支援者の一番は家族だと思います。

先ほどのシンポジストの先生たちのお話、それから今の当事者の話を含めて一人で頑張りすぎないことはものすごく大事だと思っています。家族の方が家族以外の方と相談していくと、本人が相談しなくても構いません。風通しを少しでも良くすること、「さなぎ」は動かず外との交流がないようにみえますが、実は呼吸をしています。閉じこもっている形は一緒でも、外とのつながりを家族の方が持つことがものすごく大事だと思います。元気なお母さんがいれば段々元気になるのではないかなと思います。

山口：今の話を伺って、実は私のところに相談に来られる半数の近くは診断がついていない、或いは不明な方なのです。やっぱりもしかするとアスペルガー症候群かも知れないしというそれで困っているのだということであらわれているのです。北大の田中先生がよく使われています、「仮に理解をして実際に支援する、その上で支援の肉付けをしていく」ということをおっしゃられているのですけれども、やはり特性に応じた支援の仕方というのを実際におうちの中でやっていらっしゃるかどうかな。

私どもの所に相談に来られた方の中でこういうのがありました。ご本人はいつも12時をまわって帰ってこられます。夜遊びをして帰って来られて家族とはもうほとんど話をしない、言ってもはなから聞く耳を持たないし、どんど

ん遅くなって来て、家族の生活リズムはめちゃくちゃにされます。それ以外にもお金の問題でも働かないとかがあったものですから相当困っていたんです。でも聞かないからという話の時に、紙に書いてもいいから「12時前に帰れ」とやって下さいと示しましたら、やってくれて、なんとか12時までには皆が寝れるようになったという報告がありました。その後欲張って働きに出したいみたいなことをやろうとしたら、本人がそれに反発したのか今度は朝出掛けるようになり「今度はそれで困っています」と言われました。「また口で言っています」と言うので、紙に書いて示すというやり方があるかもしれないけれども、本人も一旦ルールは守ってくれたものだから、では次のルールはどういう提示の仕方をするか家族が困っていることを出して見てルール提示を試みたらどうですかということをお伝えしました。

一度に両方のことを求めても仕方がないので、できることは何かということを実際具体的に本当に小さなことかもしれないけれども、やってみてうまく行けば「このやり方って使える」とし、そこから「支援の肉付け」をやっていくというのがあろうと思うのです。そこら辺はやはりこちら側が柔軟にならなくてははいけないし、たくさんのお話を盛り込んでも仕方がない。

今何を自分たち家族は優先的に取り組むといいのか。本人がそこでやってくれること、やれることは何だろうかということを探るしかないのかなと思います。それは身近な家族でしか分からないし、「誰々先生教えてよ」といわれても、「そんな細かいことを教えられるかい」という話になるかもしれない。やはりその部分の特性をどう理解するかということかなと思います。

座長（大高）：他にフロアの方から何かご意見ご質問等がありますか。

田嶋：大高クリニックのPSWの田嶋です。喋りたいことがたくさんあり、今日の会をものすごく楽しみにしていました。私は周りの環境を調整していくことも支援の一つとしてものすごく大事だ

と思うのですけれども、ご本人がどのようなやっ
て生きていく力を持てるのか、ストレスの解消
法だとか乗り越え方だとか、困っていることだ
けではなくて、どうやっていくのかというところ
も一方で支援していかないといけないかなと思
っています。ご家族からのご相談でどこまで
対応していった方がいいのかが分からないとお
っしゃる方が多いのですけれども、その環境調整
とご本人さんの乗り越えていく力のバランスが
すごく大事だと思うのです。その辺を先生方は
どのように工夫されているのかとかを教えてい
ただけるといいなと思います。

大村：大変難しい質問だと思うのですけれども、
両方が合って初めてうまくいくということですよ
ね。本人への支援と家族への支援。病院の場合
は大体その二通りなのですけれども、それぞ
れのケースとご本人のタイプというのもありま
す。先ほどの孤立型の方とか引きこもり、ある
いは冬眠されている方に対しては環境調整の中
から働きかけるのですけれども、本質的には本
人の力を信じていることです。だからこそ環境
調整、あるいは家族への働きかけが有効だった
と思います。

その他のタイプの方でもご本人の変わってい
く力、あるいは本来持っている生きる力がある
ということを知り、その上で家族の支援、ある
いは環境調整を行なっていくという、スタンス
でやっております。

若山：環境調整とかになりますが、大学の中で、
障がいをもっている学生さんたちがあんまりい
い子にならずにいろんな問題を提起してほしい
と思っています。そうしますとその実現のため
に団結しようという動きがあったり、みんなが
考える機会になり、そこで大学の考えが変わっ
てくることもあります。小さなトラブルでもい
いのでいろんな問題を起こしてくれるといいな
というふうに思っているところです。

山崎：私のほうでは乗り越え方としては、も
ともと「マーム」は就労の訓練をする場所です
から、対人関係を苦手とされていても、その方
に合わせていろいろロールプレイを行い、乗り越

え方を学んでいただき、できない部分は支援者
側できちんと把握しておいて、企業に就職した
際は、配慮をしてほしいところとして企業の方
にお伝えすることで、乗り越えないといけない
壁等を少し低くし、無理なく働いていただけ
るように一緒に工夫します。

あと環境調整としては、訓練を行なう中で自
分に厳しく無理をされる方がとても多く見え
ます。自分が無理をしているとなかなか言われ
ない方もたくさんみえます。そういった方が家
に戻られてから親御さんに不安を話したり、家
庭内で暴れたりという形で、ストレスを発散さ
れたりしてみえます。その辺を親御さんと連絡
を取り合っただけで家の様子も聞かせていただ
きご家族と協力しながら進めていくというところ
で環境調整を行なっています。

ですからマニュアルを作ってアスペルガーの
方はこういうふうにやりましょうと言うのは絶
対にできません。それぞれの皆さんに合わせた
方法で支援しているのが現状です。

山口：すいません、確認ですけれども本人がど
うやって生きていく力を持てるよう支援するか
ということと、それと環境調整とのバランスと
いうことでいいですか。

田嶋：本人さんを守り過ぎてしまうとそこの環
境には適応できるけれども、たとえば新しいと
ころに行ったりとか、別の変化があったりする
と、結局また適応できなくなってしまっただ
けで本人の方が苦しい思いをされると思うので
すね。ですからあまりにも支援者が入りすぎ
て環境調整し、守りすぎてはいけないと思いま
す。その辺のバランスと言いますかどこまで支
援者が入って、どこで生きていく力を信じるか
みたいなバランスがすごく難しいなと私はいつ
も思っています。

山口：本当に難しいなと私も実感しています。
答えになるのか分かりませんが所属する集
団の、家族なら家族の集団のルールとかを
はっきりさせて、言葉ではなくてもいいです
から、そこの中の決め事、それこそ「一時間
出たんだら一時間出ないでいい」ではない

けれども、そういう本人ができる事は何かを確認をして、それをやった時にほめて「次、取り組もうよ」としていく。やはり認めてあげるといふことからやるしかないのかなと思います。

座長 (大高) : はい、ありがとうございます。では最後の質問ということでお願いします。

フロア (自閉症当事者家族) : すいません、今日来てとてもよかったと思っています。

私には 28 歳の自閉的傾向のある子で、3歳の時に春日井のコロニーで診断をされ、大学受験の頃に大うつと診断され、今は統合失調症と診断されている 28 歳の息子がいます。うちにこもりがちな孤立的なタイプの子供なのでデイケアにも行けません。それで私は社会福祉協議会からヘルパーさんに来ていただいて移動支援を受けています。先ほど先生たちがおっしゃられたように、うちの中で家事をしてしてくれます。洗濯物を干したり少し食器を拭いたり洗濯物をたたんでくれたりそんなことをしています。

移動支援なので一緒に買い物に行ったり、うちに来て下さるのでそこでたまにはたこ焼きを作ったり、お好み焼きを作って一緒に食べることでその方ともすごく心が通じているみたいで、メール交換とか自分からも社会福祉協議会のところへ自転車で行って会いに行くような関係ができました。

引きこもりがちな子は外に出て行けないので、

自宅に来てもらうのが一番いいのではないかと思います。子供の生きる力を信じながら先生の言われたように春になれば出るのかなと思って気軽に待とうと、今日はありがとうございました。

座長 (大高) : 時間になりましたので今日の会はそろそろ終わりたいと思います。

今日、私は最初のフロアの当事者の方の言葉を私たちは忘れてはいけないのではないかと、それからその中でもできることとできないことがあるということをしかりと見つめていかなければならないと思いました。そして本当に十人十色の生き方をサポートすることが支援者を含めとても大事だとあらためて感じました。

今回のシンポジウムは、どちらかと言いますと支援者の人たちを対象にと考えて行ないましたが、これからもっと当事者の方たちが自由に意見を言えるような会が開かれるといいと思いました。

最後に必ずしも就労を目指さない就労支援、そして必ずしも卒業を目指さない大学の就学支援、そしてここに書いてある発達障がいを持つ青年の社会復帰支援なのですが、必ずしも社会復帰を目指さない社会復帰支援というのが本来あって、その中でいろんな人たちがつながっていけるといいなと思いました。

皆さま長い間ご静聴ありがとうございました。これで会を閉めたいと思います。



■ 平成 23 年度 精神保健福祉協会事業報告 ■

- 1 精神保健福祉普及啓発事業
こころの健康フェスティバルあいち
開催日 平成23年11月12日(土)
場所 津島市文化会館
- 2 精神保健福祉に関する研究会等
精神保健福祉シンポジウム
開催日 平成23年12月8日(木)
場所 愛知芸術文化センター
- 3 会議の開催
理事会
開催日 平成23年6月30日(木)
場所 愛知芸術文化センター
広報普及部会
開催日 平成23年8月3日(水)
場所 愛知県東大手庁舎8階研修室
開催日 平成24年1月31日(火)
場所 愛知県東大手庁舎8階研修室
協会長表彰選考会
開催日 平成23年8月25日(木)
場所 愛知県東大手庁舎8階研修室
精神保健福祉基金審査委員会
開催日 平成23年9月13日(火)
場所 愛知県東大手庁舎8階研修室
開催日 平成24年2月16日(木)
場所 愛知県東大手庁舎8階研修室
教育研修部会
開催日 平成23年12月21日(水)
場所 愛知県東大手庁舎8階研修室
常務理事会
開催日 平成24年3月22日(木)
場所 愛知県東大手庁舎8階研修室

〈会員募集のお知らせ〉

当協会では、広く会員を募集しています。

年会費：個人会員（1,000円）

団体会員（15,000円）

賛助会員（50,000円）

納入方法はゆうちょ銀行振込用紙をお送りします。

お問合せは事務局までお願いします。

平成 24 年度精神保健福祉協会総会

日時 平成24年6月21日(木)

場所 愛知県自治センター

プログラム

1 総会 午後1:40～午後2:10

2 記念講演 午後2:30～午後4:00

テーマ

「老いの風景～地域で老いるために～」

講師

日本福祉大学中央福祉専門学校専任教員・
東濃成年後見センター理事長

渡辺哲雄氏

平成 24 年度

「こころの健康フェスティバルあいち」

の開催のお知らせ

日時 平成24年11月10日(土)

場所 半田市福祉文化会館

主催 平成24年度こころの健康フェス
ティバルあいち実行委員会

編集後記

3月以降気温の差が大きく、大雨、強風、竜巻、雷、雹が降るなど自然が牙をむいているような日が続いていました。そのためか風邪を引いたり、頭痛、肩こりが酷くなったりと体調不良が続き、年齢と共に季節の変わり目がこたえるようになっていた体にはつらい毎日が続いていますが、皆様方にはいかがお過ごしでしょうか。

また今年の夏は原発が全て止まったため、なおいっそうの節電が叫ばれることでしょうか。知恵と工夫で暑い夏をなんとか乗り切りたいと考えていますがどうなりますことでしょうか。甘やかしてきた身を自然によりそって生きられるよう戻していかないといけないかもしれないですね。(T)

事務局

〒460-0001 名古屋市中区三の丸3-2-1

愛知県東大手庁舎

愛知県精神保健福祉協会

TEL 052-962-5377 (内550)

FAX 052-962-5375